第Ⅱ部　研究編

○長谷川成一　　津軽氏城跡の発達過程を探る基本資料の基礎的考察
—「弘前并近郷之御絵図」と「天和書上絵図」—

○関根　達人　　津軽氏にみる戦国の城館・元和の城館
—種里・大浦・堀越そして亀ケ岡—

津軽氏城跡の発達過程を探る基本資料の基礎的考察
―「弘前并近郷之御絵図」と「天和書上絵図」―

長谷川　成　一

はじめに

本稿では、津軽氏城跡の発達過程を探る基本資料として、「弘前并近郷之御絵図」（青森県立郷土館蔵）と「天和書上絵図」を取り上げる。その理由は、両資料ともに中世もしくは戦国期の城跡を図中に描写しており、現在ではとうてい知ることができない貴重な城跡の遺構を描写・記録していることによる。後述のように、「弘前并近郷之御絵図」は製作年代が貞享２年（1685）と判明しており、「天和書上絵図」は天和４年（1684）に作成が下命されていることから、きわめて近い年代に津軽地方の城跡と地域景観を克明に描いているという特徴がある。両者ともに製作年代が判明していることも、重要であろう。したがって、両資料から得られる情報は、1680年代における津軽地方に残された貴重な城跡・遺構、地域景観を記録したものとして無視し得ない価値を有すると考えるからである。

以上のように、両資料は津軽氏城跡を考察する上で、基本的かつ不可欠のビジュアル資料であるから、従来も研究に供されてきたし、今後もさらに多くの研究者によって活用されて行くであろうことを踏まえ、本稿では、両資料の基礎的なデータの提示をはじめとして成立と伝来・襲蔵のあり方を考察し、両資料などに示された城跡に関して比較・考証をすることにしたい。

1　「弘前并近郷之御絵図」に関する考察

「弘前并近郷之御絵図」（以下、同図を近郷絵図と略記する）は、『青森県史』資料編　近世２　津軽１（青森県　2002年）に付図として添付され、世に紹介されている絵図である。絵図の概要は、付図の解説に詳しいので、そちらを参照してもらうことにするが、行論上、理解を助ける意味から解説をもとに内容を簡単に紹介しておこう。

近郷絵図は、弘前城を中心にして約10キロメートル四方を描いた絵図で、中央に「御」の字で弘前城を示し、周辺には村落・家並み・街道筋・山野・河川を配し、地名や寺社名を図中に書き込んである。城の西側に見える樋ノ口川の留切堤跡や、石川館・青柳館など多くの中世城館が立体的に描かれ、ランドマークとしての役割を果たしている。植生・交通・土地利用・建造物などの地理情報を整理し、視覚化することを意識した構成になっている。

縮尺については、畾紙に６間を１分、１町を１寸、１里を３尺６寸と見え、3633分の１の図であることが判明する。さらに、道のりや道幅はこの縮尺にしたがっているが、堂社・人家は縮尺が適応されず小道・小川などの小規模なものは除外したとある。

前掲『青森県史』付図に掲載された近郷絵図は、同図が余りにも巨大であって２枚に分けて載せたにもかかわらず、残念ながら細部と文字情報は読み取れなかった。本報告書では、その反省に立ち、本報告書では、第Ⅰ部「弘前并近郷之御絵図」資料として、以下の

データを掲げた。つまり、カラー全体図（図１）とそれを６分割した分割図（図２～８）、加えてAdobe Illustrator CSを使用してトレース図にした全体図（図９）と分割図①～⑥（図12～17）を掲載した。以下、これらの図を記すに当たっては、Ⅰ図○と表示する。

また第Ⅰ部には、図中の地名などを、「弘前并近郷之御絵図」に見える地名一覧（以下、地名一覧と略記）としてまとめて掲げ、さらに畾紙（らいし）の翻刻文も掲載した。参照されたい。

①近郷絵図の基礎的なデータと襲蔵の状況

近郷絵図は紙本着色、和絵の具で描いた絵図で、法量は、386×365センチメートル。ほぼ正方形の形状を保持している。東西南北の方位を図中に表示して、四方からの展観が可能なようになっており、図中の記載地名なども一方向に整序して記されているわけでない。したがって、同絵図は、北を上方とした絵図の置き方でなく、あらゆる角度からの展観に耐えるように、しかも畳もしくは板の間に敷いて閲覧することを前提として描かれたものと推定される。なお、Ⅰ図１・７・16に見えるように畾紙は東北偶に置き、行頭は西側を向いている。

畾紙には、「貞享二乙丑年三月」の年紀があることから、近郷絵図の成立年は貞享２年（1685）３月と見て支障ないと考える。ところが、これほどの重要かつ大部な絵図資料であるにもかかわらず、近郷絵図製作に関する記事は、「弘前藩庁日記　御国日記」（以下、「国日記」と略記する）の該当する年月日の条には全く記録がなく、製作の過程、製作者や関係する人物なども一切不明である。

以下、このような歴史的背景を持つ近郷絵図について、弘前藩における襲蔵の状況からはじめて、基礎的な考察を加えてゆくことにしたい。

さて、近郷絵図は、弘前藩の宝永７年（1710）「御絵図目録」（弘前市立博物館蔵　本田伸「弘前藩『御絵図目録』の発見とその意義」『弘前大学国史研究』第110号　2001年所収）によれば、元禄16年（1703）の絵図改めの時点でこの絵図が藩庫に収納されていたことが確認できるので、畾紙の貞享２年は正確な成立年代を示しているとみてよかろう。

近郷絵図は、藩庁において大切に保管されていたらしく、前記「御絵図目録」に見えるほか、天保３年（1832）８月改の「二之丸御宝蔵御書物并御道具目録　全」（国立国文学研究資料館三井文庫旧蔵資料蔵　福田千鶴『科学研究費報告書　大名家文書の構造と機能に関する基盤的研究―津軽家文書の分析を中心―』2003年に全文が紹介されている）にも、

朱「五」
一、御郡中所々之絵図
　一、弘前并近郷之御絵図　　一枚
　一、弘前并近郷之御絵図下書　　一袋

とあり、近世後期にあっても弘前城二之丸御宝蔵に保管されていたことが判明する。なお近郷絵図の下書は、元禄16年改めの段階でも存在したようで、「弘前外近郷之御絵図　下画　一袋」と見えるのが、それに該当しよう。このように、弘前藩では、天保期の段階でも重要な領内絵図の一つとして当絵図を城内御宝蔵に格納していたのであった。

近郷とは　次に畾紙に見える近郷の範囲について、取り上げることにしたい（以下、第Ⅰ部の畾紙の翻刻文を参照のこと）。第Ⅰ部畾紙の翻刻文を簡単に整理すると、

土手町升形～石川出口　　１里半　　指渡　　１里12町

同所～小杉村	１里１町	指渡	28町
土手横町出口～千年山	35町	指渡	31町
同所～一ノ渡	１里16町	指渡	１里９町
新寺町出口～久渡寺	１里半３町	指渡	１里12町
茂森新町出口～上湯口村	１里１町	指渡	35町
新大工町出口～吉田町	31町	指渡	28町
同所～愛宕山	１里17町	指渡	１里６町
石渡升形～高杉村入口	１里半	指渡	１里14町
同所～三千地村	１里13町	指渡	１里７町
和徳町出口～藤崎入口	１里４町	指渡	１里

東西指渡　２里半９町　　但松崎村より兼平天神まで

南北指渡　２里半12町　　但大和沢村より三千地村まで

上に見える、東西・南北の指渡（直線距離）の範囲を示す文言によると、近郷絵図は弘前城を中心に、東は松崎村（地名一覧№.157　現南津軽郡平賀町松崎）、西は兼平天神（同№.46　現中津軽郡岩木町兼平）、南は大和沢村（同№.130　現弘前市大和沢）、北は三世寺村（同№. 80　現弘前市三世寺）と、約10キロ四方を描いた絵図であり、「弘前藩庁日記」などの資料に散見する「弘前廻り」「弘前近郷」とは、絵図に描かれたまさにこの範囲であったのである（Ⅰ図10を参照）。この範囲に、本村・枝村合わせて117カ村と弘前城下が存在したという。

具体的な事例を次に示そう。貞享元年５月、弘前藩４代藩主津軽信政が近習や腰物番、寄合小姓組・御手廻知行取などの側近の家臣たちとともに、弘前城下と近郷をめぐった時の道順を、「弘前藩庁日記　御国日記」（以下、「国日記」と略記する）貞享元年５月12日条は、次のように記す。

一、右御通筋塩分町・新町・袋宮寺後通より真土之掘替、夫より川除添、樋口上之瀬御渡被遊、駒越より吉田古城ニ御休、御茶被召上、夫より兼平之石森江被遊御出、如来瀬村より青柳之瀬、湯口・唐内坂栗木林奥・茂森町・塩分町、御帰、

と見え、廻郷の主な地名を掲げると、弘前―真土（地名一覧№.48）―樋の口（同№.51）―駒越（同№.114）―吉田古城（同№.31）―兼平（同№.42）―如来瀬（同№.53）―青柳（同№.60）―湯口（同№.66）―唐内坂（同№.65）―弘前の順であった。藩主信政は、近郷絵図の北西に該当する地域を廻ったことが窺われる（Ⅰ図12・13・14）。目的は、進行中の岩木川掘り替え工事と後述の樋の口塞き止め口、吉田古城（現岩木町大浦城）の視察にあったのではないかと推察される。藩主による弘前近郷の廻郷は、以上のような道筋で実施されたのであり、当絵図の範囲を越えるものではなかったようである。

また、貞享２年３月13日の柏木立（地名一覧№. 125、現弘前市原ヶ平付近）の火災に際して、弘前藩では近郷から消火のための火消し人足の出動を命じた。出動を下命されたのは、

一、百五拾参人	小沢村	一、四拾五人	大和沢村
一、五拾人	一野渡村	一、四拾五人	原ヶ平村
一、拾参人	上和徳村	一、拾人	清水村
一、五拾七人	小栗山村	一、五人	高崎村

合参百七拾五人

外ニ七人　　下湯口村

右之通罷出火消候趣、郡奉行書付持参之、

とあり、これらはいずれも近郷絵図のなかに見える村々であり、原ヶ平村（同№. 126）の近接村で小栗山街道（同№.124）沿いの村であるが（Ⅰ図15）、上和徳村（同№.109に隣接）や下湯口村（同№. 66）のように城下の北端（Ⅰ図14）、ないし西端の村からの消火人足の出動もなされている。

②近郷絵図の製作者について

近郷絵図の畾紙には、前述のように同絵図の製作者名が記されていない。当時、畾紙に製作者もしくは絵図作製に関わった役人を記録することは、それほど希有なことではなく、例えば延宝の絵図と称される「弘前惣御絵図」（弘前市立図書館蔵、図c）には、延宝５年（1677）６月から11月にかけて完成した際の絵図製作を下命された役人の名前、ついで天和２年（1682）の一部改訂に携わった役人の名前、貞享元年（1685）９月の屋敷替・名替・所替を行った役人の名前、元禄６年（1693）正月の屋敷替え・名替え・所替えを行った役人の名前が記録されている。元禄15年の屋敷替え・名替え・明屋敷改めは、大工頭と同小頭、分見大工・筆者の名前が列記されているので、元禄６年までのものとは相違し、実際の筆録・描写を行った実務担当者を記したものと思われる。

「国日記」貞享元年９月18日条に、「弘前御絵図」（前述の「弘前惣御絵図」を指す）を呈上した人物として「竹内吉左衛門」の名前が見えるが、この人物は、延宝５年と貞享元年の箇所に「武内吉左衛門」として出てくる。また製作から改訂の４回ともに名前があるのは、斎藤治右衛門であって、彼は製作時から元禄６年の改訂まで一貫して「弘前惣御絵図」に関わった人物のようである。

それでは、近郷絵図の製作者は、いかなる人たちであろうか。筆者は、天和２年（1682）４月、測量の技術を買われて、江戸藩邸で召し抱えられた金沢勘右衛門と清水九郎兵衛の両名ではないかと推測する。当時、測量家として高名な、金沢は金８両４人扶持、勘定役で召し抱えられ、同じく清水（この時点では太右衛門、後に九郎兵衛に改称）は並勘定人として召し抱えられた。彼らは、貞享元年９月、勘定所詰めを命じられ（「国日記」同年９月18日条）、それに先立ち金沢は家臣たちに「丁間之見様」つまり絵図製作の基本技術の伝授とトレーニングを下命されている（同前同年９月７日条）。加えて、金沢は碇ヶ関出張を命じられ、「千年山之図」製作も下命された（同前同年９月24日条）。さらには、近郷絵図完成の翌年の貞享３年（1686）３月、江戸藩邸において領内絵図の調製を下命された。羽賀与七郎氏は、金沢・清水の両名は、同年４月以降、領内を共同で測量し、11月には領内絵図を上納、翌４年正月には、弘前城の絵図の作成を行ったという（羽賀与七郎「測量家金沢勘右衛門　下」『日本歴史』120　1958年）。これらの動向を勘案すると、近郷絵図は、領内の地理情報を知悉した金沢・清水両名の指導のもとに、あるいは彼らの手によって作成されたと見て支障ないのではなかろうか。

また金沢・清水両名の作製にかかる、貞享４年（1687）７月18日の「御領分御絵図目録同合紋」（弘前市立図書館蔵津軽家文書）は、津軽領内の絵図を展覧するに当たっての手引きともいうべき性格を持つ。具体的には、弘前城から領内各地のランドマークと目される

地点への直線距離（指渡と表現）をはじめとして、同城から藩境の各地点までの直線距離、有力河川の長さ、有力山岳の高さ、弘前城と青森町など有力町村との高低、村数などを記録している（詳しくは、拙稿「弘前藩の史資料に見える白神山地」『白神研究』第２号　2005年を参照されたい）。前述の近郷絵図の畾紙に見える近郷の範囲にも、「指渡」の記述が見え、縮尺の精度、図様などを見た場合、近郷絵図は地図製図技術を本格的に習得した人物が製作したことを推測させる。そのような人物といえば、家臣たちに絵図製作の基本技術の伝授とトレーニングを下命されたことからも分かるように、金沢と清水以外には考えられない。以上のようなことからも、近郷絵図製作に両名が深く関わったと推測するのは、あながち見当はずれではないであろう。

２　天和書上絵図に関する考察

天和４年正月（同年は２月に貞享へ改元、本稿では資料の表記に基づいて天和の元号で記す）、弘前藩は後述のように領内各村へ村況調査を命じ、村ごとに「御蔵給地田畑屋鋪其外諸品書上帳」（通称、天和書上帳）を作成させた。天和書上絵図（以下、天和絵図と略記）は、そのデータをもとにした絵図仕立てが下命され、作製マニュアルにしたがって各村を統一的に描いた絵図群をいう。天和書上帳の歴史的な意義や、その後に実施された弘前藩の総検地で、幕末にいたるまで徴租の基準になった統一検地である貞享検地については、『青森県史』資料編　近世２　津軽１（青森県　2002年）261頁に詳しいので、そちらを参照されたい。本稿では天和絵図の残存状況を踏まえて、伝来のあり方や資料学的な側面からの考察を中心に論を進めて行きたい。

本論文末に掲載した天和書上絵図リスト①（以後、リスト①と略記）と天和書上絵図リスト②（以後、リスト②と略記）は、現在確認できる範囲での天和絵図の現存リストである。リスト①の方は、現存の天和絵図もしくは絵図の忠実な写・控図と推察されるものと旧八木橋文庫蔵絵図模写である。旧八木橋文庫蔵絵図模写は、一時、青森県立郷土館で八木橋文庫の天和絵図模写を保管した際、1984年10月、筆者が同館で調査・採訪した写真をもとに作成した。現在、当模写図の所在は不詳である。

リスト②は、青森県内の自治体史に掲載された天和絵図の写真版とトレース図をリスト化したものである。これ以外の自治体史にも、天和絵図として掲げているものはあったが、疑わしいものは極力排除した。ここでは、上記のリスト①とリスト②をもとに考察を進めてゆく。

①天和絵図の作成

天和絵図は、天和４年正月、次のような布達によって、作成が下命され、実行に移された（前掲『青森県史』248号）。

村絵図ニ可書載覚

一、田之位上々・上・中・下・下々五段、畑之位上・中・下、山畑・切替畑、永荒・当荒、空地、苞、用水ニ不罷成沼・溜池（長横間数）歩数、森、林、薮但何やふ、野原、野山、芝山、草山、萱山、雑木山、杉山、桧山、柴山、漆林、右之分木数・木之何寸まわり、場所之長横間数、寺社、屋敷、宮、社、廟所、堤川除間数、村堺

者何村境小名付、

一、今度御検地ニ付、在々ニ而村絵図并小帳仕立申ニ、御蔵諸給人田畑ニ応し銭収集候義可有之候、大勢打寄酒買給候事堅無用ニ可被申付候、村絵図并帳面相済申候ハ、村々庄屋共ニ銭受払勘定可為仕候間、銭受取之員数并払方一々帳面付置候様、急度御申渡可有之候、

御郡月番所より

正月廿四日

関　弥二右衛門殿

葛西左助殿

上記の布達によれば、領内全域における各村内の田畑の等級を各々定め、水利、周囲の山林、寺社、堤、村境などを書き記し、絵図などの仕立てに庄屋などの不正のないようにとの申渡であった。この中には城跡に関する規定は見あたらないが、上の布達に続いて、「村絵図仕立様之事」として、具体的かつ詳細なマニュアルが示された（同前）。この中に、「一、古城　　何間　何間」と、城跡の書き上げと規模を明記することが示されていたのである。したがって、村内に古城・古館の遺構が存在する各村では、自村の絵図に必ずそれらを描き込むことが責務として位置づけられた。

これほどの大事業であるにも関わらず、実は、「国日記」には、この間の絵図作成と徴収、そして藩庁への収納に関する記事は、一切見あたらない。もっとも、「国日記」の天和４年２月の冊は欠本であって、実際に記録がなかったかどうかは分からない。それを補うものとして「藩日記抄」12（弘前市立図書館蔵津軽家文書）天和４年の簿冊を閲覧したが、該当の記事は見あたらなかった。理由は不明であるが、当時、領内総検地の準備が並行して行われていたこともあって、あるいは関係記事がそちらに集中してしまったのかもしれない。これ以上の推測は控えたい。

リスト①に見える、各村絵図の年紀を見てみると、最も早い絵図で天和４年２月14日（リスト①№55の東光寺絵図）、遅いもので同年12月28日（リスト①№３堀越村絵図）である。天和絵図の大部分の作製月は、天和４年の２月と３月であって、一部４月にずれ込んでいる。№３堀越村絵図は、この記載が正確であるならば、再提出の月日を記したものであろうか。それはともかく、前述のように天和４年正月24日の布達の後、大部分の村絵図は、２～３カ月の比較的短期間に製作され、領内各村から藩庁へ提出されたようだ。

絵図の形態　絵図の寸法については、特に布達の中に定めた条項が見あたらず、現存している絵図と模写した絵図に記されている記事から推測するしかない。リスト①から具体例をひいてみると、リスト①№１の藤崎村絵図は、202×192センチメートル、№４の大光寺村絵図は、78×98.2センチメートルとあり、原絵図もしくは忠実な控図と推測される天和絵図では、このようなサイズであった。旧八木橋文庫蔵絵図模写では、№28の宿河原村絵図の原図は「タテ２尺３寸、ヨコ３尺３寸５分」、№29の岩館村絵図は「タテ３尺２寸５分、ヨコ３尺６寸」、№30の八幡館村絵図は「タテ３尺５寸、ヨコ４尺９寸６分」とあるので、これらの絵図は、横が約70センチメートル～１メートル、縦が約１メートル～150センチメートルのサイズであったことが知られる。つまり村落規模によって、絵図の寸法に大小があったようだ。

②天和絵図の保存と伝来について

天和絵図は、近郷絵図において紹介した、宝永７年(1710)「御絵図目録」や天保３年(1832)８月改の「二之丸御宝蔵御書物并御道具目録　全」にも掲載されることがなく、どのような保管状況であったのか不明であった。例えば、リスト①の№.１にある「藤崎村絵図」のみが、弘前市立図書館蔵津軽家文書の中に所蔵されているに過ぎず、他の大部分の天和絵図は、弘前城の二の丸蔵に格納された形跡はないようだ。

それでは天和絵図は、藩庁のどの部署に保管されていたのであろうか。従来の研究を見た限りでは、藩政時代における天和絵図の保管状況について触れた研究は見あたらない。そこで、当絵図に記されている記事を参考にすると、リスト①の№.２岩館村絵図には次のような書き入れがある。

尓時天保三壬辰年七月十九日
　勘定所地方席御より借用之上写置もの也、
　　当時尾崎組　　御代官　　吉村弁司（印）
　　築館紋次郎
　　手代町居邑　今井文次郎（印）
　　仮手代尾崎邑　八木橋忠兵衛（印）
　　岩館邑庄屋　午之助判（この箇所破損、リスト②№.55で補った）

この書き入れからすれば、岩館村では天保３年７月、藩から天和絵図を借用し、写図を作製したようだ。借用先は、勘定奉行所地方席からであった。写図を作製するに当たっては、尾崎組代官と手代の印が押捺してあり、図の正確性を証明する仕組みになっていたようである。

同じくリスト①№.３堀越村絵図の「貼紙」には、「右絵図、天保十三壬寅年、勘定奉行所地方席ヨリ拝借用之上写取申候、庄屋　喜八郎」と見える。これらの記述からすれば、天和絵図は、藩政後期の天保時代に、勘定所地方席に保管され、リスト②№.55によると、嘉永年間には各組の代官所に保存されていたようである。堀越村のように庄屋が勘定所から借用して模写したとあるので、本来、村方では庄屋が、藩庁では勘定所地方席が同絵図を保管することになっていた。つまり天和絵図は、庄屋の手元と藩の勘定所地方席に各１点、少なくとも一村につき計２点が存在したと考えられるのである。おそらく、藩庁の勘定所地方席に正本の本図が、庄屋に控図が保存されていたのであろう。

藩政時代の保存・保管のあり方については、上記の通りであるが、近代に入ってからは、如何なる伝来の経過と保存の措置がなされたのであろうか。それについては、下記のａ『中里町誌』とｂ『館城文化』第２集に、次のような見解が見られる。

a.「その原本（天和絵図を指す―筆者注）は廃藩（明治四年）の時新県に引き継がれ、近年まで青森県庁で保管し、その後県立図書館に移されたが、終戦後の県庁バラックの火事で隣りの図書館書庫に火が入り焼失した。控え本は各部落の庄屋が代々引継いで持っていた筈であるが、今残るものは稀である。幸中里村の分は、現在中里町役場に保管されている。」『中里町誌』（中里町　1965年）64頁

b.「天和之書上帳は津軽始って以来の精密な調査、その上絵図までついている貴重品である。絵図、書上帳は終戦後の失火で青森図書舘で全部焼失している。その写し

が研究家の手で部分的に写されているのだけ現存してある。大字畑中、八反田（天和では本田舎舘村）の絵図の分は、慶応元年の写絵図が村役場より発見されているものである。他の絵図は佐藤雨山氏と故葛西覧造氏の写図を再写図したものである。」『館城文化』第２集（田舎館村郷土誌研究会　1959年）３頁

上記ａとｂの見解をまとめると、天和絵図は、維新後、青森県庁へ引き継がれて県庁で保管がなされ、その後青森県立図書館へ移管された。終戦後、同図書館が焼失した際に県庁の建物に移した絵図も焼けてしまった。一部、村役場に保存されているものもある、というものであろう。これらの見解が正確であるかどうかを検討しよう。

リスト②№.48牛潟村絵図に関して、1935年（昭和10）ころに村役場書庫に保管してあった古図を写したとあり、bに見える田舎館村の例も合わせると、当時の町村役場には、天和絵図が一部保管されていたようだ。また、リスト②№.53の大坊村絵図の原図は、青森県立中央図書館蔵であること、同②№. 62の平田森村絵図と№. 99の中野村絵図は青森県庁蔵または保存と見えるので、近代に入ってから、県庁→県立図書館へ移管、との伝来情報はおおむね信用できるであろう。

ついで、現在、我々が天和絵図群の原本並びに控え図を閲覧できない最大の理由は、同図を最終的に保存・保管していた青森県立図書館の書庫が、1945年（昭和20）７月末の青森空襲での図書館焼失の後、県庁の建物へ移動したにも関わらず、それが再度の火災によって焼亡したことによる、というのが上記の見解である。しかし、青森県立図書館編『青森県立図書館史年表』（青森県立図書協会　1978年）、青森県立図書館史編集委員会編『青森県立図書館史』（青森県立図書館　1979年）の関係記事を捜索したが、空襲による火災は見えるが、敗戦後の当該の火災の記事は見あたらなかった。そこで、長年、同館に勤務された三上強二氏へお尋ねしたところ、上記『青森県立図書館史』と『青森県立図書館史年表』の二書には、後者の当該火災はなぜか掲載されなかったが、火災は実際に存在したとのお話であった。

以上のことからすれば、近代に入ってからの天和絵図の保管・保存の状況は、aとbの見解を信用して良いのではないかと思われる。このように、近代に入ってからの災害によって、残念ながら藩庁に保管してあった天和絵図群（正本・本図）は、灰燼に帰してしまったが、リスト②に見える各自治体史に掲載されている天和絵図群は、個人蔵や市町村などの所蔵にかかるものであるから、藩政時代における庄屋保管分（控図）がそれに該当するものと推察される。それ故、今後の天和絵図研究においては、庄屋保管分の控図であった同絵図をいかに捜索・発掘し、それの保管・保存、さらにはどのように閲覧に供するかなど、捜索の努力と保存・閲覧のシステム作りが急務であろう。

３　近郷絵図と天和絵図・弘前城下絵図との比較

本章では、近郷絵図に描写されている各村と城跡とを、城跡が書き込まれている現存の天和絵図、並びに弘前城下絵図との比較を行うことにしたい。取り上げるのは、弘前城下、藤崎村•藤崎城跡、堀越村と堀越城跡、石川村と石川城跡である。福村城跡や大浦城跡は、近郷絵図に明晰に描写されているが、残念ながら天和絵図が現存していないため、比較ができない。なお、近郷絵図に見える、各城跡の発展過程と歴史的な位置づけについては、

関根達人「城跡にみる南部氏・津軽氏　近世大名への道筋」（長谷川成一・千田嘉博編『日本海域歴史大系第４巻　近世篇Ⅰ』清文堂　2005年）があるので、参照されたい。

本稿では、天和絵図を中心とした各絵図との比較の中で、城跡とそれを包含する地域景観について近郷絵図の意義を検討することにしたい。

①弘前城下絵図との比較

近郷絵図の弘前城の内部は、「御」の一字が城内に記されていて（図ａ）、郭内の建造物や施設に関しては、全く描くところがない。これは当時の城絵図にあっては、最高機密である郭内を描写しない例はよくみられるところであり、同図が特殊なのではない。ただし、当城の範囲は、樋の口付近での掘り替えが進行していたとはいえ、まだ水量を保持していた岩木川を西堀に見立て、北は四の郭から、南は馬屋町までを、城の領域として描いている。これは、図ｃ「弘前惣御絵図」と整合しており、両者の関係の深さを示していよう。

さて図ｃ「弘前惣御絵図」（延宝５年〈1677〉11月28日　東西160.5×南北156.5センチメートル　弘前市立図書館蔵）は、『絵図に見る弘前の町のうつりかわり』（弘前市立博物館1984年）によると、次のような解説が付されている。

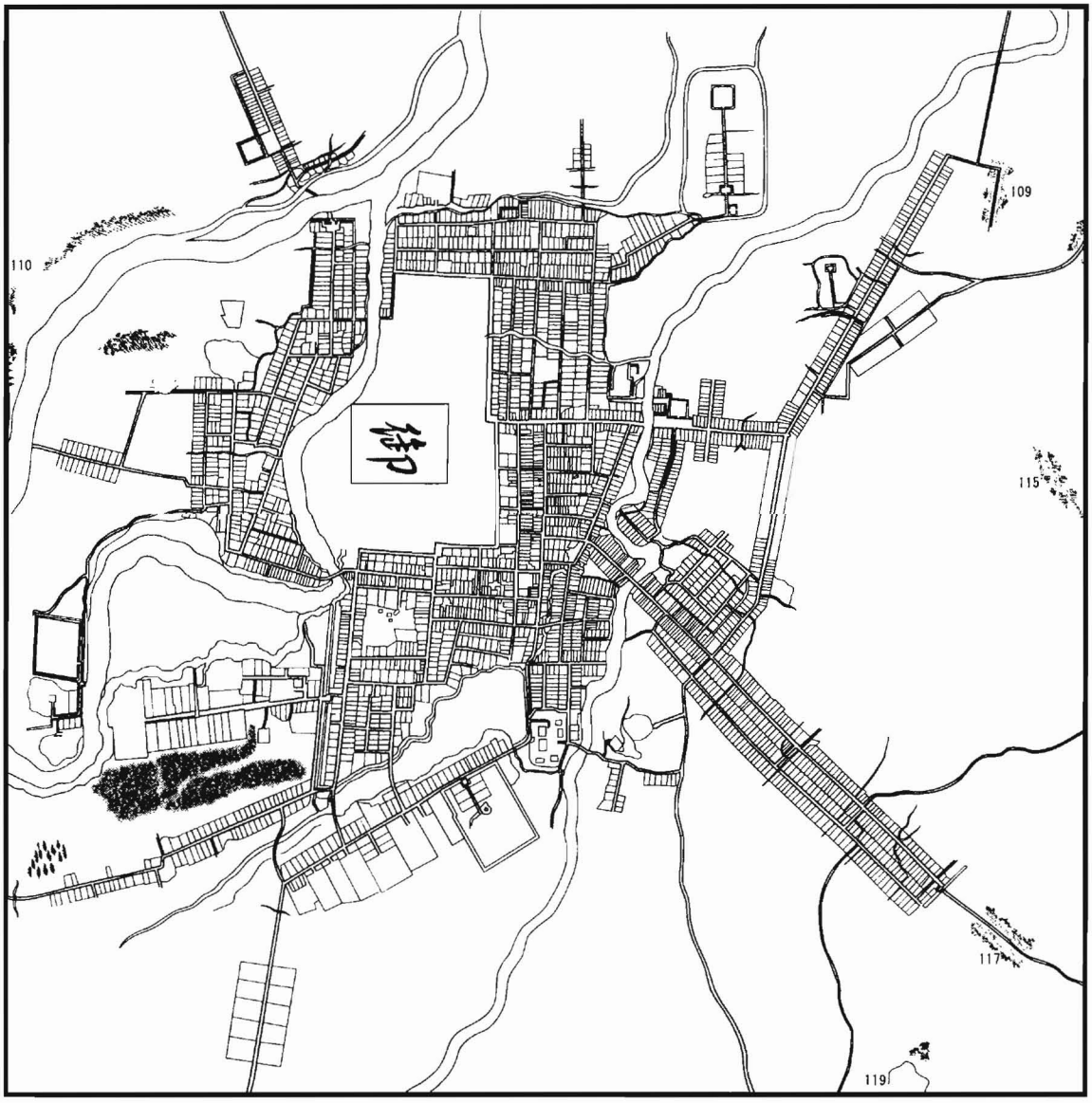
この絵図は、１分方眼の筋目に２間縮尺（1200分の１）にまとめ、各屋敷割には御家中や町支配など色わけして姓名が記されてある。

この絵図は、延宝２年（1674）の岩木川掘替えのあとに出来上がったもので、その後、天和２年（1682）の岩木川一筋への大工事や貞享元年（1684）、駒越町などの新しい町割り替えのあと、さらに元禄６年、15年にも書き改められた。それらのところには、幾重にも張り紙がなされており、転換期の町の様子をよく伝える資料として貴重な絵図である。

この絵図を、寛文の絵図と比べて移動のあるところをみると、樋口川跡が細い川筋と河原に、また、上和徳村、東長町、北横町、南横町、春日町、東川端町、荒町南側の侍町、紙漉町、新銅屋町、賀田道（現駒越町）、茂森新町の延長、御蔵屋敷、織物会所などが、新しく取り立てられ、その他新坂切り通し、常源寺坂が認められ、耕春院隣りにあった月峰院が現在地に移っている。なお、この絵図が製作された前年には、２分１間（600分の１）の域郭図がつくられている。

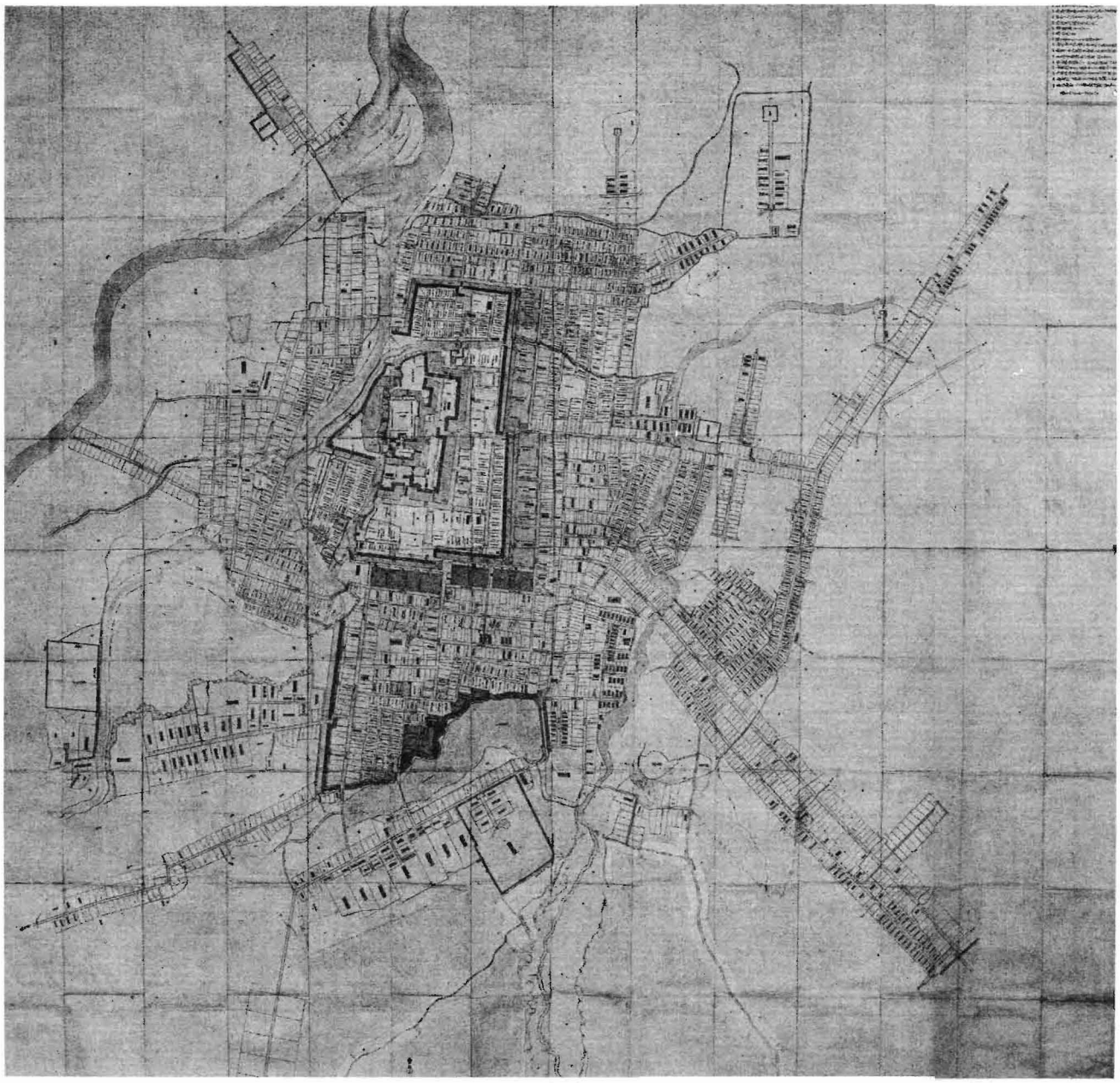
上記の解説は、当絵図の特徴を的確に指摘しており、17世紀後半における弘前城下の変容を正確に記録したものと評価できる。したがって、近郷絵図の弘前城下を検討する場合も当解説は、参考になろう。

貞享２年（1685）の近郷絵図（図ａ）と比較した場合、図ｃ「弘前惣御絵図」（前掲『絵図に見る弘前の町のうつりかわり』から転載）は貞享元年９月に「屋敷之替」「名替」「所替」を改めたと同図の畾紙にあるので、城下の基本的な構成に両者の相違は認められない。上記解説の「貞享元年（1684）、駒越町などの新しい町割り替えのあと」も、「弘前惣御絵図」では新町から岩木川まで町並みが継続しているが、近郷絵図では一部町並みがとぎれている。その他、松森町から北西に延びる街道と町並み、和徳町から北西に延伸する街道に並ぶ町並みなどが、「弘前惣御絵図」にはあって近郷絵図に描かれていない箇所がある。これは、元禄６年・15年にも「弘前惣御絵図」の屋敷替や名替の改訂が実施された際に町並みの拡大があって、その状態を元図である延宝５年「弘前惣御絵図」に書き加え、描写したものと解釈したい。



図ａ 「弘前并近郷之御絵図」弘前城部分（青森県立郷土館蔵）

図ｂ 近郷絵図 樋の口部分



図c 「弘前惣御絵図」（弘前市立図書館蔵）

以上のことからすれば、近郷絵図（図a）は、「屋敷之替」「名替」「所替」を施した貞享元年時における「弘前惣御絵図」（図c）を基本的に参照したか、それを近郷絵図にほぼそのまま描き込む形で製作されたと考えて良いのではなかろうか。むしろ、「弘前惣御絵図」よりも貞享2年の弘前城下をより正確に描写しているとも言えようか。

なお、天和2年の樋の口での掘り替え工事によって、弘前城の下を流れる岩木川を駒越川へと一本化する事業については、従来、よく分からなかった。しかし、近郷絵図にどのようにして樋の口でのせき止めが行われたのかが図示されたこと（図b）によって、具体的な工事の様子を知ることが可能になった。この点においても、近郷絵図の価値は高いと考えられる。

②藤崎村と藤崎城跡

周知のように藤崎城跡は、平川右岸に接し、平野の小陸起地を利用した平城で、南北約730メートル・東西200メートルの規模を持つ（沼館愛三『みちのく双書第34集　津軽諸城の研究（草稿）』青森県文化財保護協会　1977年）。ところで藤崎村と同城跡が、弘前藩の公式記録に初めて登場するのは、慶安２年（1649）「津軽領大道小道磯辺路并船路帳」（『新編弘前市史』資料編２　近世編１　　1996年　909～910頁）においてである。それによれば、

藤崎古城　但平城、大道筋

一、本丸之内東西四拾弐間、南北三拾間、堀之広さ三方共ニ六間宛、深さ七尺宛、土手之高さ壱丈宛、東之方ニ口有、西之方平か川、

一、二之丸之内東西江百拾九間、南北へ九拾五間、四方堀之広さ南北九間宛、東西七間宛、深さ七尺五寸宛、土手之高さ九尺宛、東之方ニ口有、

一、三之丸はたか館之内東西へ百廿五間、南北へ九拾五間、四方堀之広さ九間宛、深八尺三寸五寸、土手之高サ九尺宛、東ノ方ニ口有、

一、本丸より戌亥之方ニ小丸有、東西江廿四間、南北江廿七間、三方堀広さ但二方ハ拾壱間宛、一方本丸との間六間、深さ九尺宛、土手之高さ壱丈宛、西之方右之平か川、

一、右之小丸より西に又小丸有、東西へ六拾六間、南北へ六拾弐間、三方堀之広さ二方ハ八間、一方右之小丸との間拾一間有、深さ壱丈宛、土手之高さ壱丈宛、西之方ハ右之平か川、

一、東南北之方深田、但浅田も有、其外大野地牛馬不叶、城下南より北へ町屋有、

上記の記述によれば、藤崎村の城跡は、当時「藤崎古城」と呼ばれた平城で、本丸・二之丸・三之丸・小丸２カ所があり、土塁の外に、本丸・二之丸・三之丸・小丸の各郭は、堀でもって区画されていたようだ。これは城郭としての形態をかなり保持していたように見え、慶安２年の時点では、藤崎村を城下と形容していることからも、藤崎城跡は戦国期の遺構をかなり濃厚に保持していたのであった。

しかし、それが承応２年（1653）「津軽領道程帳」（『青森県史　資料編　津軽１　前期津軽領』（青森県　2002年　742頁）には、

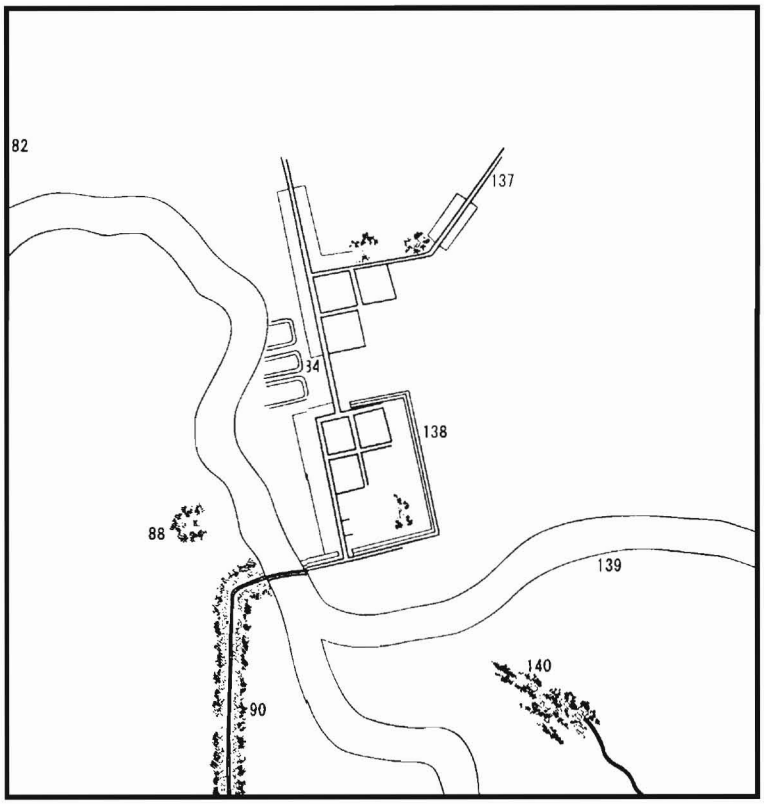
一、津軽野村より藤崎村迄　　同断拾九町

一、平賀川と黒石川ノ落合藤崎渡舟御座候、広サ弐十三間、深サ四尺五尺、夏水干ニハ是より一町下ニかち渡御座候、大水出候へハ、川広サ五十間も六十間ニも罷成申候、岸ノ高サ一間余、

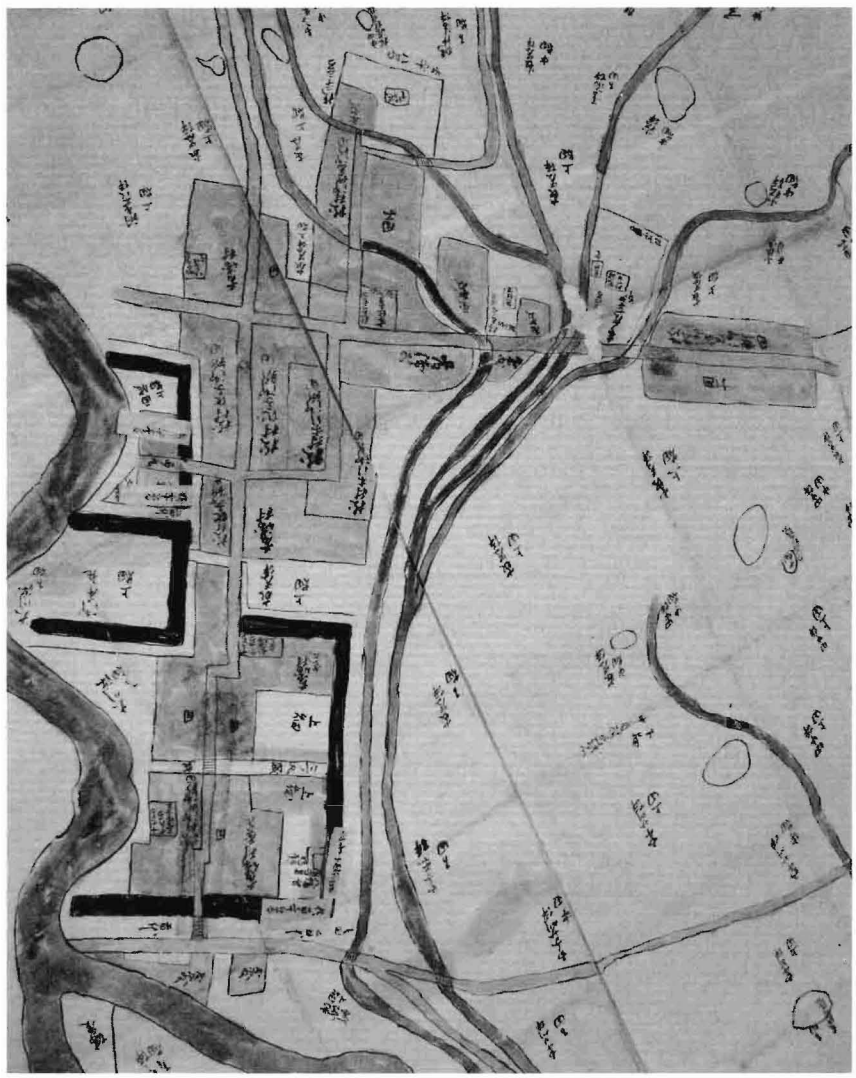
一、藤崎村之内ニ古平城有、只今ハ田畠ニ罷成申候、堀なとも無御座候、

と見え、藤崎村には古城はあるが、田畠に変化してしまい、堀も存在しないとある。わずか４年しか経過していないにもかかわらず、同村における藤崎古城の周囲は急激な田畠の開発が実施されたようで、堀割も潅漑用水路路にでも変化してしまったのであろうか。ともかく、この間の藤崎古城の破壊は急激に進行したようだ。

藤崎村の天和絵図（図ｅ）では、藤崎古城の各郭は土塁で囲まれた３カ所が認められ、南から順にみると、規模の大きな郭には、「御本丸」、次が「西丸」、そして「西館」とあり、それぞれ上畑の位付けがなされている。西丸には苗代や町屋の設定がなされ、平川添いに



図ｄ 「弘前并近郷之御絵図」藤崎城部分



図ｅ 「天和絵図」藤崎村と藤崎城部分

「館神」があったようだ。また堀は、前掲「津軽領道程帳」にも記されたように、郭の間には全く存在せず、小丸の存在も確認できない。おそらく、その存在すらも忘れ去られたか、削平されたかで、畑地化してしまったと推定される。

近郷絵図（図 d）では、藤崎城跡は、「古城」（地名一覧№. 84）と記され、外に「藤崎」（同№. 138）、「青森海道」（同№. 137）、「浅瀬石川末」（同№. 139）の地名が見える。古城の郭の描き方は、おおむね天和絵図に沿ったものであり、藤崎村の町屋の並び、同村を囲繞している土塁、青森街道の道筋、平川の蛇行、平川と浅瀬石川の分岐も同様である。ただし、青森街道にぶつかっている４本の潅漑用水路は、近郷絵図には描かれていない。これは、そもそも両絵図作製の目的が相違するところに由来すると思われ、天和絵図の作製要領は、前章に紹介したとおりである。

③堀越村と堀越城跡

『新編弘前市史　資料編Ⅰ　古代・中世編』（弘前市　1995年　484頁）によると、堀越城跡は、弘前市街から旧国道７号を通って石川に至るほぼ中間、市内堀越字川合・相田にある。城域の規模は東西・南北約350メートルで、これに城下町の一部を「町曲輪」として取り込んだ規模の大きな城郭。城跡のある堀越集落は、岩木川の支流の一つ平川と大和沢川の合流点から南西500メートルの、津軽平野南部の沖積扇状地に位置しており、沖積扇状地の東端、東を流れる平川の氾濫原から約３メートルの比高差をもった高みを利用して設けられた平城である、という。なお同城の来歴や縄張り図などについては、上記同書を参照されたい。

さて堀越村と同城跡が、弘前藩の公式記録に初めて登場するのは、慶安２年（1649）「津軽領大道小道磯辺路并船路帳」（『新編弘前市史』資料編２　近世編１　1996年　912頁）においてである。それによれば、

堀越古城　但平城、大道筋

一、本丸之内東之方州間、南廿壱間、西廿間、北五拾弐間半、四方堀之広さ十間宛、深さ三間宛、土手之高さ弐間宛、西北之方ニ口有、

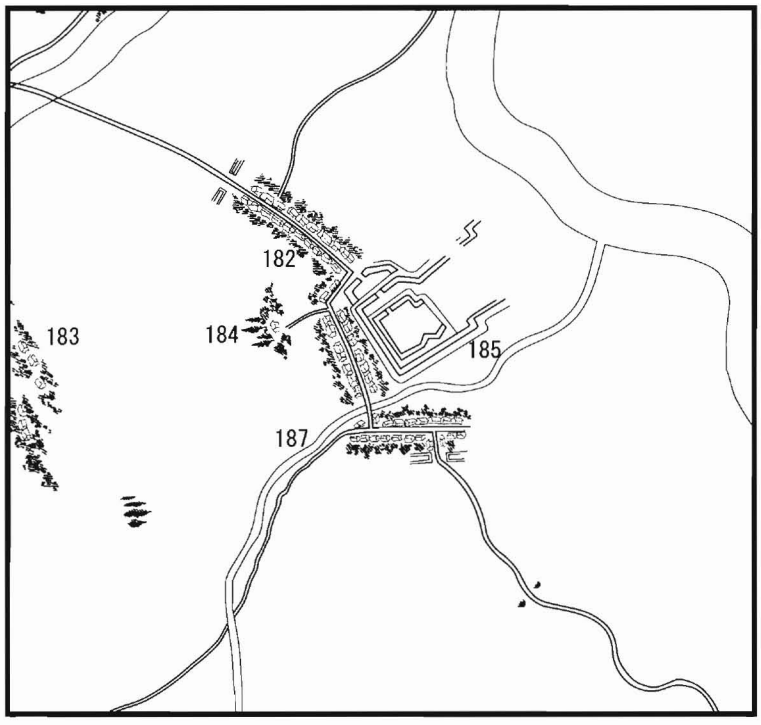
一、二之丸之内東方五拾五間、南十七間、西五拾間、北廿七間半、四方堀之広さ八間宛、深さ四間宛、土手之高さ壱間半宛、東西之方ニ口有、

一、三之丸之内東西江四拾三間、南北へ八十五間、四方堀之広さ九間宛、深さ三間宛、土手之高さ壱間半宛、但右之外ニ南北ニ堀有、此堀之広さ拾五間宛、深さ弐間、土手之高さ壱間半宛、但南北二重堀也、東西北ニ口有、

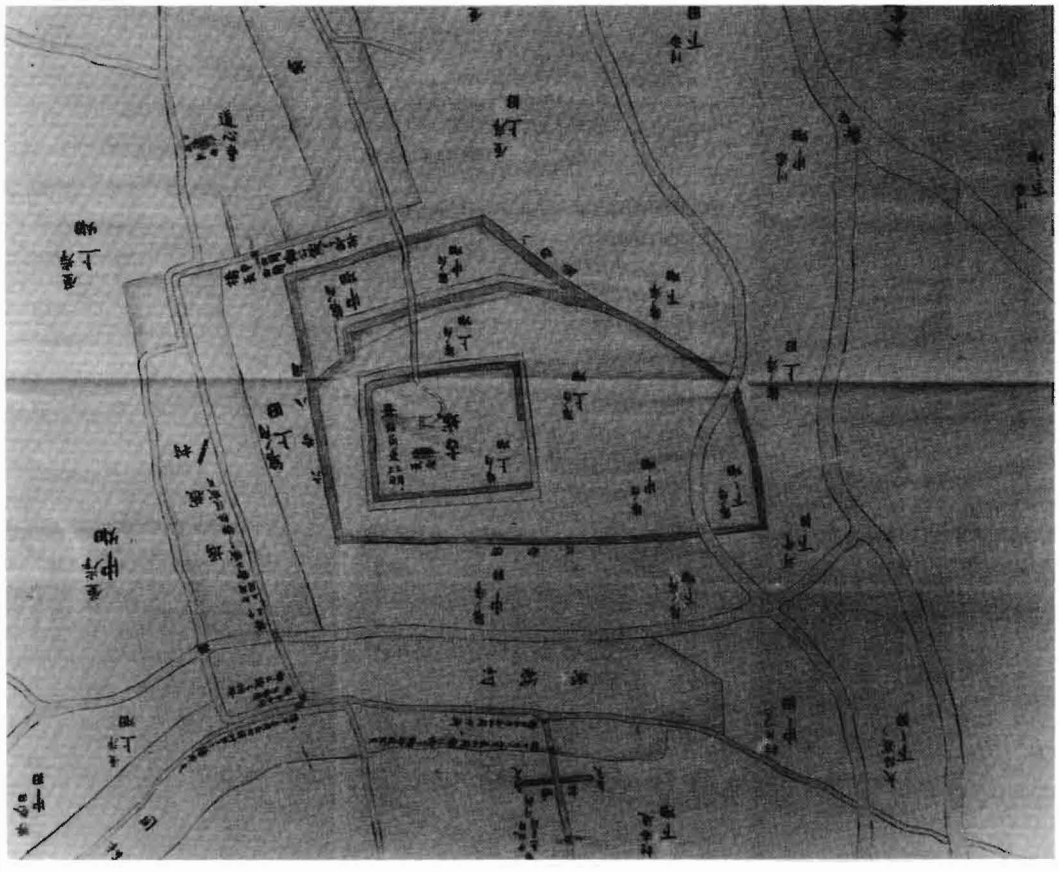
一、本丸より西に小丸有、東方七拾七間、南拾弐間半、西七十間、北四拾五間、四方堀広七間宛、深さ弐間宛、土手之高さ壱間半宛、東西に口有、

一、惣がわ四方共ニ用地、但浅田、城下より三町東ニ平か川有、此広さ廿七間、深弐尺三寸五寸、但歩渡り、西北之方城より弐町三町外ニ門家川有、但小川、南之方城下ニ大道有、馬かけ四方共ニ自由、但城下西より南へ町屋有、

上記の記述によれば、堀越村の城跡は、当時「堀越古城」と呼ばれた平城で、本丸・二之丸・三之丸・小丸があり、土塁の外に、本丸・二之丸・三之丸・小丸の各郭は、堀でもって区画されていたようだ。前節で言及した藤崎古城と同様、城郭としての形態を依然として保持していたように見え、藤崎と同様、慶安２年の時点では、堀越村を城下と形容して



図ｆ 「弘前并近郷之御絵図」堀越城部分



図ｇ 「天和絵図」堀越城と堀越村部分

いることからも、堀越城跡は戦国期の遺構をかなり濃厚に保持していたのであった。城下の西側から南にかけて街道沿いに町屋が展開していたとある。

しかし、それが承応２年（1653）「津軽領道程帳」（『青森県史　資料編　津軽１　前期津軽領』（青森県　2002年　742頁）には、

一、取上村より堀越村道　　道は、四間弐拾四町五十間、

一、此間ニ門家川と申用水川御座候、往還之妨ニ不罷成候間、不及記ニ候、

一、堀越村之内ニ古平城有、唯今ハ田畠ニ罷成、土手・堀之体少々御座候、壱里山と堀越村之間六町拾間、

と見え、城内は田畠になったとあり、さらに土手や堀は遺構が少々残っているに過ぎなかったようである。

近郷絵図（図ｆ）に見える堀越村並びに付近の地名は、「堀越村」（地名一覧№. 182）「道心寺」（同№. 184）「古御城」（同№. 185）「前川」（同№. 187）である。天和絵図（図ｇ）のそれは、堀越村、古城、道心寺などであり、郭や街道、河川、村方の屋敷の配置などの位置関係は両絵図ともおおむね一致する。城郭内部の郭を隔てる土塁と堀割は、天和絵図・近郷絵図ともに上記「津軽領道程帳」の記述に見えるように残存しており、天和絵図作製時においては承応２年（1653）の状況とあまり大きな変化はなかったように見える。承応期の景観が、近郷絵図にほぼ継承されたと推測される。

近郷絵図（図ｆ）の堀越城跡は、前述のように「古御城」（地名一覧№. 185）であり、天和絵図（図ｇ）は「古城」である。近郷絵図における古城の記述に関しては、津軽氏ゆかりの城跡は「御」を付して敬意を示しているという（前掲関根氏論文「城跡にみる南部氏・津軽氏　近世大名への道筋」）。慶安２年（1649）「津軽領大道小道磯辺路并船路帳」や承応２年（1653）「津軽領道程帳」、天和絵図では、「堀越古城」もしくは「古城」と表記された。このことは、近郷絵図の資料的な性格を考える上で重要であろうから、「おわりに」において、さらに付言することにしたい。

近郷絵図と天和絵図に描かれた堀越村と同城跡については、おおむね地名、郭・土塁・堀割など内部の描写、街道・村方・河川などの配置に関しては、ほぼ一致する。しかし、近郷絵図の方がはるかに地図・絵図としての精度が高く、これは両絵図作製目的が相違するところに由来するものと考える。

④石川村と石川城跡

石川城は、別名大仏鼻城ともよばれ、岡館・猿楽館・月館・坊ノ館・寺館・高田館・茂兵衛殿館・寺山館・孫兵衛殿館・小山館・八幡館等と石川十三楯を構成し、他の一二楯がほぼ一列に並んでいるのに対し、石川城のみが横にそれていることから大仏鼻の名が出たという（『日本歴史地名大系２　青森県の地名』平凡社　1982年　520頁）。貞享検地帳によると、古館が石川村内に七カ所あった（同前）。

『新編弘前市史　資料編Ⅰ　古代・中世編』（弘前市　1995年　434頁）によると、石川城跡は、弘前市石川字大仏・平山・寺山・小山田、石川集落の南の大仏ケ鼻丘陵とその北西に続く台地上にあり、この地点は、尾開山から北に伸びる丘陵が津軽平野の南端に接する場所であり、広大な津軽平野が終わって、平川河谷へと変わる地点、つまり津軽平野の南の入口・境界に位置。城内の最高所は南東端の大仏ヶ鼻丘陵で、標高は97.9メートル。その

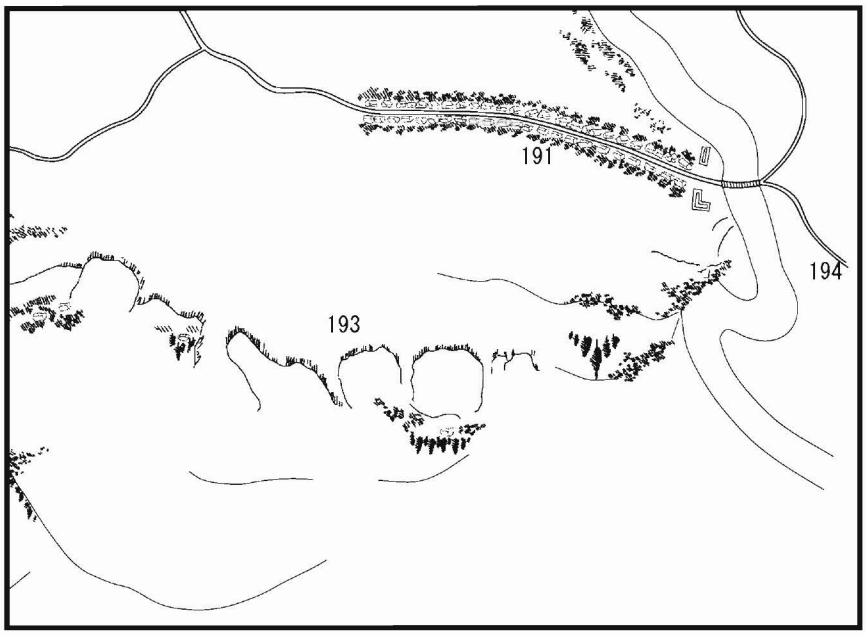


図 h 「弘前并近郷之御絵図」石川城部分

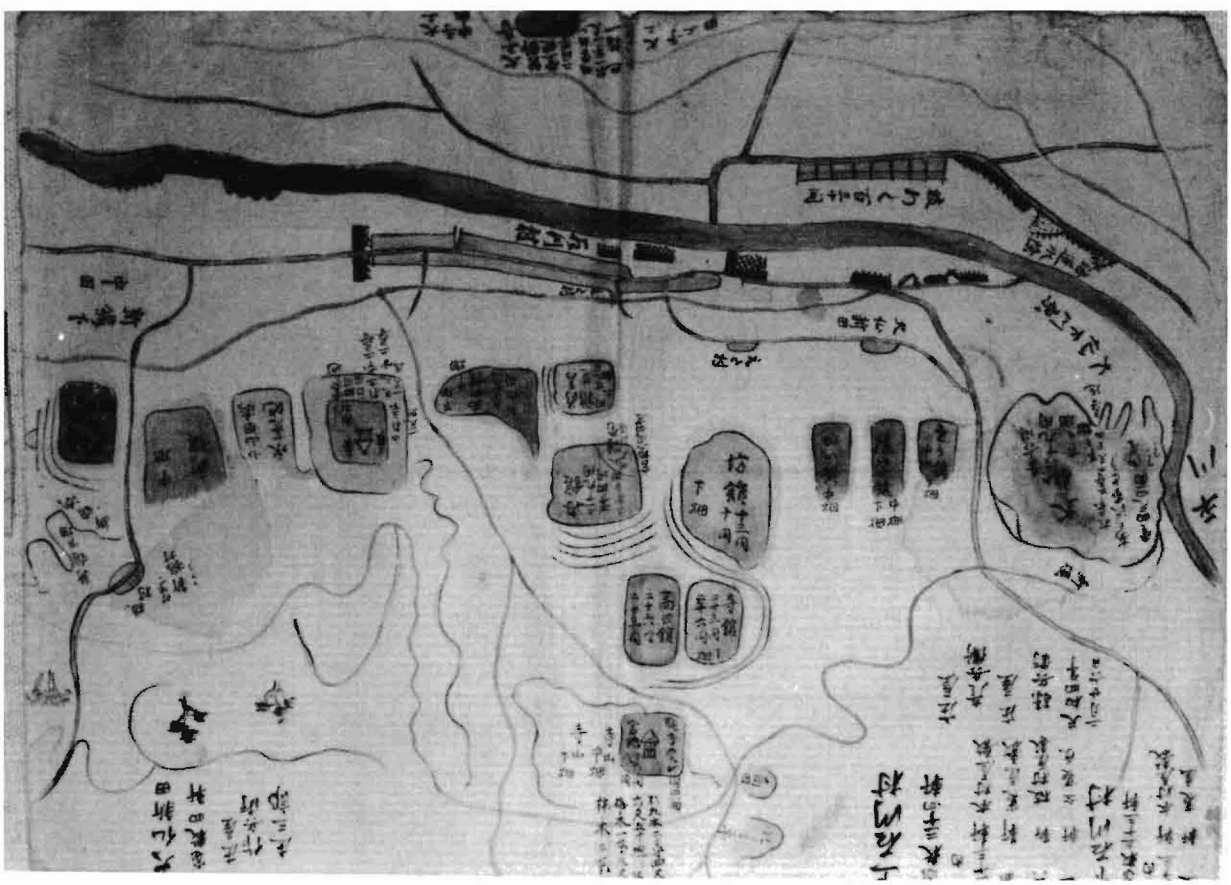


図 i 「天和絵図」上石川村と石川城部分

西側、通称寺屋敷地区もはぼ同じ高さの丘陵をなし、大仏ケ鼻の南側は比高差40メートルの断崖となって切れ落ちている。北西に続く台地は標高60メートルはどの平坦地だが、ここでも低地との比高差は10メートル近くに達する。城域全体の規模は東西約850メートル、南北約550メートルの、大規模な城跡である、という。なお同城の来歴や縄張り図などについては、上記同書を参照されたい。

石川村や石川城跡については、先述の藤崎や堀越のように慶安２年（1649）「津軽領大道小道磯辺路并船路帳」や承応２年（1653）「津軽領道程帳」に関係記事が全く見えない。その理由は不明であるが、おそらく両資料が街道を主体にした記録であることや、近郷絵図（図h）でも分かるように石川城跡は同村と街道筋から隔たっているので、藤崎や堀越のような記述がなされなかったのではないかと推察される。

近郷絵図（図h）に見える、石川村•同城跡に関する地名は、「石川村」（地名一覧№.191）、「古城」（同№.193）「碇関海道」（同№.194）であり、石川城跡は「古城」の表記であった。天和絵図（図i）では、大仏ケ鼻丘を「大仏」とのみ記してあって、特に古城・古館の名称を付すことはしていない。同所の西側に各館跡が詳細に掲げられており、大仏の丘から西へ順に館名を記すと、「をか館」、「猿楽館」、「かい館」、「坊館」・「寺館」・「高田館」、「為真館」・「内館」、「西町館」、「新館」２カ所と見え、現在の館跡名と相違する部分もあるが、詳細な書上となっている。近郷絵図では、上記の館跡は一括して「古城」（№.193）とあり、土塁などの描写は認められず、平野にせり出した館跡の丘陵と各郭を仕切る空堀跡を描いているに過ぎない。しかし、近郷絵図では、青柳館などと違って、「古城」との地名記載をしている石川城跡は、単なる館跡ではないことを示しており、土塁や堀割をもつ堀越城や藤崎城と類似した扱いをしたとみてよかろう。堀越城や大浦城・福村城などの津軽氏ゆかりの城跡ではないにしても、石川城跡は特別な扱いを受けていたようだ。

おわりに

津軽氏城跡の研究に不可欠な「弘前并近郷之御絵図」と「天和書上絵図」の概要と伝来、資料的な特徴について、以上、３章にわたって述べてきたが、以下にまとめることにしたい。

近郷絵図も天和絵図も、図の作成過程、製作者、絵図徴収のあり方など、両絵図に関わる、最も基本となる弘前藩の国日記には、残念ながら一切の関係記事が見あたらない。理由は明確にできなかったが、天和２年（1682）の越後幕領検地やそれに続く領内総検地などの大事業が続き、絵図作製などの作業は勘定所等の専務事項として行われたため、公式記録である藩日記などには掲載されにくいという事情があったのかもしれない。それはともかく、本論ではそのような中にあって、国日記に依存せずに、次のような見解をまとめることができた。

まず第一に、近郷絵図は、弘前藩庁において宝永期から弘前城内に保管され、天保期には二の丸宝蔵に格納された絵図であって、藩政時代を通じて「弘前并近郷之御絵図」という絵図名に変更はなかった。製作年代は、同図の畾紙に見えるように貞享２年（1685）３月。製作に携わったのは、天和２年に江戸藩邸で召し抱えられた、測量家として名高い金沢勘右衛門と清水九郎兵衛、もしくは彼らから絵図製作の技術を教授された弘前藩の地方

役人たちだったと推察される。近郷絵図は、17世紀後半から末期にかけて、貞享元年からの領内総検地による領内生産状況の把握と、領内絵図の作成による弘前藩の地理情報の悉皆獲得という、４代藩主津軽信政の領内掌握の大きな展望のもとに実施された事業の一環であったと考えられる。同時期には弘前城下絵図も製作され、それとともに城下近郊についても近郷絵図のような精緻な絵図が製作されたことで、弘前藩最大の都市弘前城下と周辺農村の把握がビジュアルな形でなされたのであった。なお、この時期あたりから、「弘前廻」、「弘前近郷」の文言が各資史料に見えるようになり、当該の区画は以後、組などの行政区域とは異なる、弘前藩にとって特別な地域として認識されるようになったと考えられ、近郷絵図の持つ歴史的な意義は高いといえよう。

近代に入ってからの近郷絵図の保管・伝来の状況については不明であり、1998年、青森県は東京の古書肆から近郷絵図を購入したことから、現在は周知のように青森県立郷土館に収蔵され、特別展などの折りに展示されている。

第２に、天和絵図は、貞享元年からの領内総検地に先行する事業として実施された、領内村況調査の一環として作製され、村内状況を記録した書上帳とともに、そのデータをもとにして作成され、各村から藩庁へ呈上された絵図群であった。本論文では、現在確認できる本図・控図、後世の模写、自治体史等の刊本に紹介されている天和絵図のイラスト図など、現存する天和絵図と推測される資料をリスト化し、「天和書上絵図リスト」①②として掲げた。その結果、天和絵図は、本来、２点作成され、藩庁の勘定所地方席に本図、各村の庄屋にその控図が保管されたことが分かった。近代に入ってからは、藩庁が保管してきた本図は県庁から県立図書館へ移管されたが、終戦後の火災によって本図の方は焼失。現在では庄屋の手元に保管されていた控図が、各自治体や個人の所蔵にかかり、残存したようである。

第３に、近郷絵図に描かれている城跡と、現存している天和絵図の城跡と景観を村落比較すると、天和絵図の方は在方で作製しただけあって、図様は粗雑である。それに対して近郷絵図の城跡の描写は精緻であり、前述のように地図製作技術を習得した人物による製作にかかることを想定させる。天和絵図に関して言えば、同図の作製マニュアルに見えるように、古城の規模を書き上げよとの指示に拠っており、加えて城跡が田畑に転化しているかどうかも書き上げる必要があったことによると考えられる。しかし、藤崎・堀越・石川各城跡に見えるように、城跡の形状はおおむね近郷絵図の描写と合致しており、近郷絵図には規模の書き上げや細かい地名表記がなされていないので、天和絵図の情報は貴重である。

なお、慶安２年（1649）「津軽領大道小道磯辺路并船路帳」や承応２年（1653）「津軽領道程帳」の記述に見える城跡と両絵図を比較すると、17世紀中葉において津軽領では古城・古館の破壊、畑地化が急速に進行していることが判明する。これは当時における弘前藩の新田開発が加速度的に推進されていた状況を反映している。天和絵図では、城跡は区別なく古城・古館の表記であったが、近郷絵図では前掲関根氏論文が指摘するように、津軽氏にゆかりの深い城跡は「古御城」、それ以外は「古城」の表記がなされている。具体的には、「古御城」の堀越城跡と「古城」の藤崎城跡を比較すると、藤崎城跡は堀越と違い堀跡・土塁・小丸などの破壊が著しい。各村落の事情が背景にあったかもしれないが、「古御城」の堀越城跡は現況の遺構を可能な限り残そうとする意図があったのではないか。藩庁の基

本方針として開田畑・開発が当時期に急速になされ、城跡の破壊が進行する中にあって、城跡として残そうと意図した城と残すには及ばないと判断した結果の呼称と考えられる。その判断基準が、藩主家である津軽家との所縁の深浅であったのではなかろうか。また津軽氏発祥の地と称される種里城跡も同様であって、17世紀後半あたりから藩主家による種里城跡と大浦光信墓所の聖地化が構想され、整備が進められた（長谷川成一「一体の像から―大浦光信像と津軽氏―」北原かな子•郭南燕編『津軽の歴史と文化を知る』岩田書院2005年）。種里城跡の問題と上記の件は、津軽氏の先祖顕彰の時代状況の中で把握する必要があろう。

弘前城下に関しては、城内は別として、延宝5年（1677）「弘前惣御絵図」（図c）と近郷絵図を比較した場合、「弘前惣御絵図」が貞享元年、元禄6•15年の各時点での屋敷替や名替・所替による絵図への書き加えや変更の跡が認められるのに対し、近郷絵図は貞享2年3月の時点における正確な城下の景観を描写している点で評価されよう。

以上のことから、天和絵図と近郷絵図の関係を類推するならば、天和4年に全領的に作製された天和絵図は、その翌年の近郷絵図製作の基本材料として活用されたと考えられる。前掲「弘前惣御絵図」も同様であり、近郷絵図は当時、全領内的に作製された各絵図類、具体的には、天和絵図、城下絵図、領内絵図などを素材として、弘前廻・弘前近郷の区域を抽出して作製されたと推察する。つまり近郷絵図の製作は、天和2年、弘前藩が測量家として名高い金沢・清水両名を召し抱え、貞享～元禄初期にかけて領内各地の絵図や領内絵図などの製作に集中的に乗り出したときに該当し、このような弘前藩の全領の地理・生産などの情報を悉皆的に掌握しようと企図した機運の中での事業であったと考えられるのである。

【本文中に掲出した以外の参考文献】

・国立史料館編『史料館叢書3　津軽家御定書』（東京大学出版会　1981年）
・弘前市教育委員会編『史跡津軽氏城跡保存管理計画策定報告書』（同教育委員会　1989年）
・北海道・東北史研究会編『海峡をつなぐ日本史』（三省堂　1993年）
・白峰旬『日本近世城郭史の研究』（校倉書房　1998年）
・千田嘉博『織豊系城郭の形成』（東京大学出版会　2000年）
・『青森県史　資料編　近世1　近世北奥の成立と北方世界』（青森県　2001年）
・藤木久志・伊藤正義編『城破りの考古学』（吉川弘文館　2001年）
・長谷川成一編『街道の日本史3　津軽・松前と海の道』（吉川弘文館　2001年）
・新編弘前市史編纂委員会編『新編弘前市史　通史編2（近世1）』（弘前市市長公室企画課　2002年）
・『青森県史　資料編　考古4　中世・近世』（青森県　2003年）
・白峰旬『豊臣の城・徳川の城　戦争・政治と城郭』（校倉書房　2003年）
・長谷川成一『日本歴史叢書63　弘前藩』（吉川弘文館　2004年）
・北東北三県共同展実行委員会『描かれた北東北　北東北三県共同展2004』（同委員会　2004年）
・国絵図研究会編『国絵図の世界』（柏書房　2005年）

天和書上絵図リスト①（現存絵図もしくは絵図控・旧八木橋文庫蔵絵図模写）

【現存絵図もしくは絵図控】

No.	所蔵	表　題	年　月　日	収載刊本	古城・古館	備考（絵図中の村方の書上を掲載した）	法　量	請求記号
1	弘前市立図書館津軽家文書	藤崎村絵図	天和4年3月14日	『藤崎町誌』第4巻付録	御本丸　西丸　西館	＊家数307軒半　57軒本村屋敷　1同裏屋敷　9軒畑屋敷　9枝村屋敷　1同裏屋敷　2畑屋敷　1土取跡屋敷　207軒半御新田屋敷　庄屋兵左衛門	202×192	M37
2	平賀町個人	岩館村絵図	天和4年2月21日	『新編弘前市史』資料編2　近世編1付図	なし	「天保三年七月十九日御勘定所地方席より借用之上写置もの也」 岩館邑　家数20　10本村屋敷　1裏屋　8枝村屋敷　庄屋弥助判		
3	小栗山公民館	堀越村絵図	天和4年12月28日	『史跡津軽氏城跡保存管理計画策定報告書』	古城	家数　98　81本村屋敷　17裏屋　庄屋　太郎左衛門印　「右御絵図、天保十三壬寅年、御勘定所地方席ヨリ拝借之上写取申候　庄屋喜八郎」		
4	平賀町個人	大光寺村絵図	天和4年3月14日	『青森県史』資料編　近世2　津軽Ⅰ口絵	古城２ヶ所 （内１ヶ所には古城瀧本とあり）	家数 46　40本村屋敷　6裏屋	78×98.2	

【旧八木橋文庫蔵絵図模写】

No.	所蔵	表　題	年　月　日	写真の有無	古城・古館	備　　考（同上）	法　量
5	旧八木橋文庫	金山村絵図模写	貞享元年3月22日	有　モノ	古館２ヶ所	屋敷50軒　12軒本村屋敷　3軒同裏屋　29軒枝村屋敷　6軒同裏屋　庄屋四五兵衛	
6	同　上	垂柳村絵図模写	天和4年3月2日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数27軒　「庄屋長右衛門書上絵図」	
7	同　上	五本松御新田村絵図模写	天和4年2月29日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数24軒　18軒本村屋敷　2軒枝村屋敷　4軒同羽黒平　庄屋作兵衛	
8	同　上	四日町村絵図模写	天和4年2月22日	有　モノ	（古城・城館なし）	庄屋次郎左衛門	
9	同　上	四日町村絵図模写		有　モノ	（古城・城館なし）		
10	同　上	上・下追子野木村絵図模写	天和4年3月7日・2月28日	有　モノ	（古城・城館なし）	上追子野木村－家数12軒　7軒本村屋敷　1軒同裏屋　３軒枝村屋敷　１軒同裏屋　庄屋久右衛門 下追子ノ木村－家数9軒　本村屋敷　庄屋五郎左衛門	
11	同　上	上・下浅瀬石村絵図模写	天和4年3月6日	有　モノ	毛内館、古館	上浅瀬石村　家数73軒　庄屋伝兵衛　下浅瀬石村　家数63軒　庄屋源左衛門	

12	同　上	平田森村絵図模写	天和4年3月11日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数14軒　10 軒本村屋敷　　4軒枝村屋敷 庄屋権兵衛　＊略絵図あり	
13	同　上	尾崎村絵図模写	天和4年3月16日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数16軒　15 軒抱屋敷　18軒一年作屋敷 42軒給人屋敷　2軒裏屋　10軒新田屋敷　庄屋万右衛門　＊略絵図あり	
14	同　上	本田舎館村絵図模写	（記載なし）	有　モノ	（古城・城館なし）	家数31軒　8 軒御蔵屋しき共　21軒給人　3軒給人　3軒裏屋　（庄屋の記載なし）	
15	同　上	上石川村絵図模写	天和4年2月26日	有　モノ	をか館・猿かく館・かい館・坊館・寺館・高田館・内館・為真館・西町館・新館2ヶ所	上石川村－家数34軒　23軒本村屋敷　4軒裏屋敷　6軒枝村屋敷　1軒裏屋敷　庄屋彦兵衛 下石川村－家数53軒　43軒本村屋敷　5軒裏屋　庄屋孫兵衛	
16	同　上	館田村絵図模写	天和4年3月9日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数33軒　30 軒本村屋敷　　3軒裏屋　庄屋太郎兵衛	
17	同　上	大光寺村絵図模写	天和4年3月15日	有　モノ	古城２ヶ所	家数46軒　40 軒本村屋敷　　6軒裏屋　庄屋作右衛門	
18	同　上	相馬村絵図模写	天和4年3月3日	有　モノ	めのこ館・　館	家数33軒　18 軒本村屋敷　　1軒裏屋　14軒枝村　庄屋惣左衛門　「天和図　相馬村古館写」	
19	同　上	天和図ノ小栗山村古城絵図模写		有　モノ	古城（上高舘・中高舘・下高舘）　古城		
20	同　上	境松村絵図模写	天和4年3月11日	有　モノ	花館	家数26軒　9軒本村屋敷　2軒枝村やしき　2軒畑やしき　1軒水呑やしき　12軒御新田やしき　庄屋甚左衛門	
21	同　上	小関村絵図模写	天和4年3月12日	有　モノ	古舘	庄屋弥兵衛　「小関村勘定所地方」（ほか記載なし）	
22	同　上	門外村絵図模写	天和4年2月20日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数18軒　本村屋敷　　庄屋助左衛門 門外新田家数22軒　本村屋敷　1軒本裏屋　庄屋源五兵衛	
23	同　上	平田森村絵図模写	天和4年3月11日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数11軒　本村屋敷10　枝村屋敷4　庄屋権兵衛	
24	同　上	尾崎村絵図模写	天和4年3月16日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数86軒　抱屋敷15　一年作屋敷42　裏屋2　新田屋敷10　庄屋万右衛門	
25	同　上	川部村絵図模写	天和4年3月17日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数27軒　20軒本村屋敷　2軒明やしき　1軒畑やしき　3軒枝村やしき　　11軒御新田やしき　庄屋左五左衛門	
26	同　上	上表升村絵図模写	天和4年3月14日	有　モノ	上表升村之内古館	家数25軒　14軒本村屋敷　2軒裏屋　4軒畑やしき　3軒古館村江越石　　庄屋佐左衛門	
27	同　上	上田舎館村絵図模写	天和4年2月晦日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数42軒　7軒庄屋御蔵共ニ　29軒一年作給人　1軒山伏　5軒裏屋　庄屋孫右衛門	

28	同　上	宿川原村絵図模写	天和4年2月19日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数10軒 本村屋敷　庄屋嘉兵衛 「原図タテ二尺三寸　ヨコ三尺三寸五分」	原図2尺3寸×3尺3寸5分
29	同　上	岩館村絵図模写		有　モノ	（古城・城館なし）	「原図ニ家数年号ナシ　書上帳ニ曰ク　庄屋弥介　五人組頭ハ弥二兵衛　同左門九郎　同久介　同長三郎」「タテ三尺二寸五分　ヨコ三尺六寸」	原図3尺2寸5分×3尺6寸
30	同　上	八幡舘村絵図模写	天和4年2月28日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数37軒　24軒本村屋敷　6軒裏屋　7軒枝村屋敷　庄屋重右衛門 「原図タテ三尺五寸ヨコ四尺九寸六分」　一里塚の土盛りと木の描写	原図3尺5寸×4尺9寸6分
31	同　上	切明新田村下絵図模写	天和4年3月15日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数19軒　庄屋甚兵衛判	
32	同　上	本町村絵図模写	天和4年3月15日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数40軒　25軒本村屋敷　4軒裏屋　10軒枝村屋敷　1軒同裏屋　庄屋孫左衛門	
33	同　上	唐牛村絵図模写	天和4年2月23日	有　モノ	古館	唐牛村　家数21軒　20軒本村屋敷　1軒裏屋　庄屋久右衛門 唐牛新田　家13軒本村　1軒裏屋　庄屋宗助	
34	同　上	下猿賀村絵図模写	年月日ナシ	有　モノ	（古城・城館なし）	家48軒　7軒御蔵屋敷共　4軒禰宜　2軒坊主　27軒給人　8軒屋敷者　庄屋五右衛門	
35	同　上	藤崎村絵図模写	天和4年3月14日	有　モノ	御本丸・西丸・西館	庄屋兵左衛門	
36	同　上	福村絵図模写		有　モノ	古城3ヶ所		
37	同　上	水木村絵図模写	天和4年3月20日	有　モノ	古城	家63軒　42軒本村屋敷　10軒裏屋　11軒枝村屋敷　庄屋三郎左衛門	
38	同　上	国吉村ノ古館絵図模写		有　モノ	上・中・下古館		
39	同　上	天和図ノ下湯口村ノ館跡			青柳館		
40	同　上	碇関村絵図模写	天和4年2月29日	有　モノ	古館	碇関村　家数64軒　61軒本村屋敷　1軒裏屋　庄屋新左衛門 碇関新田　家21軒本村　1軒裏屋　庄屋宗左衛門	
41	同　上	長峰村絵図模写	天和4年2月28日	有　モノ	古館・小館・篠館・花岡館	長峰村　家数34軒　30軒本村屋敷　4軒裏屋　庄屋次左衛門　古館・小館 九十九新田　家11軒本村屋敷　庄屋介五郎 花岡館新田　家数8 本村屋敷 庄屋作右衛門	
42	同　上	唐竹村絵図模写		有　モノ	古館3ヶ所	古舘	
43	同　上	横内村絵図模写	貞享元年4月11日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数56 本村家数50　枝村屋敷14 庄屋八十郎	
44	同　上	野崎村絵図模写	貞享元年3月25日	有　モノ	古館2ヶ所	家数63 本村家数42　枝村屋敷51　枝村野尻新田　同大矢沢新田10軒　同小矢沢新田17軒	
45	同　上	広船村絵図模写		有　モノ	古城・古舘		
46	同　上	小国村絵図模写		有　モノ	古館		
47	同　上	新館村絵図模写	天和4年3月17日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数25 庄屋勘助（古城・城館なし）	
48	同　上	石郷村絵図模写	天和4年2月29日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数20 庄屋仁左衛門（古城・城館なし）	

49	同　上	高樋村絵図模写	天和4年3月7日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数21軒　11軒本村屋敷　2軒裏屋　6軒枝村屋敷　裏屋2　庄屋甚兵衛　（古城・城館なし）	
50	同　上	垂柳村絵図模写		有　モノ	古館	家数27軒　8軒御蔵屋敷共　7軒一年作13軒給人　8軒屋敷者　庄屋長右衛門　古館	
51	同　上	苦木村絵図模写	天和4年2月29日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数13軒　12軒本村屋敷　1軒裏屋　庄屋惣左衛門　（古城・城館なし）	
52	同　上	上湯口村絵図模写	天和4年	有　モノ	空堀跡１ヶ所	家数11軒　枝村1軒	
53	同　上	茂屋（雲谷）村絵図模写	天和4年3月12日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数40　雲谷牧新田18軒　大畑ケ沢牧新田14軒　タモ木野牧新田8軒	
54	同　上	堂ノ前村絵図模写	天和4年3月14日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数13軒本村屋敷　7軒枝村御新田　10軒畑屋敷　15軒枝村屋敷　庄屋孫右衛門　（古城・城館なし）	
55	同　上	東光寺村絵図模写	天和4年2月14日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数30軒　13軒本村屋敷　10軒枝村屋敷10軒畑屋敷　庄屋孫右衛門　（古城・城館なし）	
56	同　上	上猿賀村絵図模写		有　モノ	（古城・城館なし）	家数34軒　9軒御蔵屋敷共　7軒諸給人　8軒屋敷者　庄屋仁兵衛　（古城・城館なし）	
57	同　上	猿賀新田絵図模写		有　モノ	古城	町次之家数103軒　同庄屋2軒　〆105軒　庄屋孫左衛門　同半十郎　古城	
58	同　上	高館村絵図模写	天和4年2月23日	有　モノ	古城2ヶ所	家数19軒　14軒本村屋敷　1軒裏屋　4軒枝村屋敷　庄屋専助	
59	同　上	本江村絵図模写	天和4年2月27日	有　モノ	古城	家数51軒　25軒本村屋敷　1軒裏屋　1軒水呑　2軒同刈　16軒枝村地子新田　10軒枝村漆地子新田　庄屋惣右衛門	
60	同　上	新法師村絵図模写		有　モノ	（古城・城館なし）	家数6軒　新法師村新田2軒（古城・城館なし）	
61	同　上	五本松御新田村絵図模写	天和4年2月29日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数24　本村家数18　枝村屋敷4枝村屋敷羽黒平4軒　庄屋作十郎（古城・城館なし）（古城・城館なし）	
62	同　上	葛原村絵図模写	天和4年3月3日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数20軒　10軒本村屋敷　3軒裏屋　7軒枝村屋敷　庄屋兵左衛門　（古城・城館なし）	
63	同　上	五代村絵図模写	天和4年3月4日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数42軒　7軒本村屋敷　5軒裏屋　20軒枝村屋敷　庄屋小兵衛　高木新田村家数15庄屋孫兵衛	
64	同　上	上四ツ石村絵図模写	貞享元年4月2日	有　モノ	（古城・城館なし）	家数28軒　13軒本村屋敷　15軒枝村屋敷庄屋小兵衛　高木新田村家数15　庄屋左助・四郎兵衛　枝村下四ツ石村　（古城・城館なし）	
65	同　上	合子沢村絵図模写		有　モノ	（古城・城館なし）	家数30軒　18軒本村屋敷　12軒枝村屋敷庄屋彦左衛門　（古城・城館なし）	

天和書上絵図リスト②（自治体史等掲載分）

No.	所収自治体史略名	表題（括弧は仮題、一部改めた表題もある）	年　月　日	写真・イラスト図	備考（ネーム・キャプション等を掲げた）	大きさ	掲載箇所、頁
1	藤崎４	藤崎村絵図	天和4年3月14日	カラー写真	藤崎村　家数307軒半　内　57軒本村屋敷　1軒同裏屋　9軒畑屋敷　9軒枝村屋敷　1軒同裏屋　2軒畑屋敷　1軒□□□屋敷　「弐百六七間半御新田屋敷」　庄屋善左衛門	250×150	付図
2	藤崎１	藤崎村絵図の部分（万蔵寺跡、万蔵寺の知行地・御堂屋敷、藤崎城、街道、真那坂林）等級図	天和4年3月14日	モノ写真			藤崎１の本文
3	藤崎４	藤崎村全図	天和4年2月	カラー写真		300×125	付図
4	五通１	金山村天和の絵図		モノ写真	（木村家文書）		467
5	常村誌	水木村天和図抄	天和4年3月20日	イラスト図	庄屋三郎右衛門		口絵
6	常村誌	（富柳村御新田村絵図）	天和4年2月28日	イラスト図	庄屋澤右衛門		口絵
7	常村誌	（福舘村絵図）	天和4年2月27日	イラスト図	福館村庄屋源兵衛		口絵
8	常村誌	天和四年当時の水?舘村		イラスト図			口絵
9	常村誌	徳田村天和図抄	天和4年2月22日	イラスト図	徳田村　家数6軒　庄屋傳兵衛		口絵
10	常史Ⅰ	天和四年当時の水?舘村		イラスト図	（旧村誌より調製）		口絵
11	常史Ⅰ	徳田村天和図抄	天和4年2月22日	イラスト図	徳田村　家数6軒　庄屋傳兵衛 （旧村誌より調製）		口絵
12	常史Ⅰ	水木村天和図抄	天和4年3月20日	イラスト図	庄屋三郎右衛門 （旧村誌より調製）		口絵
13	常史Ⅰ	（富柳村御新田村絵図）	天和4年2月28日	イラスト図	庄屋澤右衛門 （旧村誌より調製）		口絵
14	常史Ⅰ	（福舘村絵図）	天和4年2月27日	イラスト図	福館村庄屋源兵衛 （旧村誌より調製）		口絵
15	竹館誌	天和四年新舘村書上絵図		イラスト図			口絵
16	竹館誌	天和四年広舟村の絵図		イラスト図			口絵
17	竹館誌	天和四年唐竹村の絵図		イラスト図			口絵
18	竹館誌	天和四年小国村書上絵図		イラスト図			口絵
19	竹館誌	（切明御新田村絵図）	天和4年3月15日	イラスト図	切明御新田家数19軒　庄屋甚兵衛		口絵
20	竹館誌	平六井戸澤切明村切絵図		イラスト図			口絵
21	岩町誌	新岡村の図／天和四年書上新岡村図式	天和4年	イラスト図	天和四年書上新岡村図式　家数31軒云々委細本文ニアリ 新岡村某氏縮図調製　小名ヲ略シタルモノナルベシ		221
22	岩町誌	葛原村之図／天和四年書上葛原村図式	天和4年	イラスト図	天和四年書上葛原村図式　家数20軒　外ニ楮新田2軒云々 中村正良縮図調製		258

23	岩町誌	宮地村天和の図／宮地村天和年間書上地図	天和	イラスト図	宮地村天和年間書上地図　家数34軒内容ハ本文宮地ノ所ニ記載セリ参照ノ事 中村正良縮図調製		263
24	岩町誌	五代村天和頃の図／天和ノ頃ノ図式今ノ五代村ノ一部	天和の頃	イラスト図	天和ノ頃ノ図式今ノ五代村ノ一部　築舘ナルガ如シ若シ然リトスレバ三ッ森堰ト八幡堰ト位置区別ハ如何ト思ハル見ル人ノ判断ニ任ス 正良調製		282
25	岩町誌	天和四年書上新法師村図式	天和4年	イラスト図	中村正良縮図調製		390
26	大鰐中	天和４年の大鰐村絵図写	天和4年	モノ写真	大鰐村29軒　大鰐新田17軒　大日堂新田11軒		表見返
27	大鰐中	天和４年の長峰村絵図写	天和4年	モノ写真	長峰村34軒　九十九森新田11軒　花岡館新田8軒		裏見返
28	大鰐中	天和の絵図（蔵館村）	天和4年2月24日	イラスト図	大日堂が見えない天和の絵図の蔵館村 庄屋太左衛門　家数28軒　内　19軒本村屋敷　9軒枝村屋敷		430
29	大鰐中	天和４年（1684）大鰐庄屋書き上げの模写（大鰐村絵図部分）	天和4年2月27日	イラスト図	大日堂新田11軒　庄屋満左衛門		431
30	大鰐中	天和の大鰐村絵図（部分）		モノ写真	天和の絵図の萩桂付近に平川洪水防止の乱杭がある		433
31	大鰐中	天和の大鰐村絵図（部分）		イラスト図	天保（天和ヵ）四年絵図の模写で、当時大鰐は三村に分かれ、高舘を挟んで三社宮があった。		472
32	大鰐中	天和の大鰐村絵図（部分）		モノ写真	庄屋惣左衛門の描いた天和の絵図の薬師堂と稲荷宮の部分		473
33	大鰐中	天和の大鰐村絵図（部分）		イラスト図	天和の絵図に羽黒権現は２つ森の上方にあり、現羽黒グランド付近		481
34	大鰐中	天和の大鰐村絵図（部分）		イラスト図	天和絵図に薬師堂と稲荷宮が並んで大鰐枝村の高地にある		492
35	大鰐中	天和の長峰村絵図（部分）		イラスト図	天和の絵図の模写、広い境内の長峰村八幡宮と阿弥陀堂、後方の神岡山から三把の沢に鷹狩の御鳥屋が多くある		594
36	大鰐中	天和の長峰村絵図（部分）		モノ写真	元永峰村の阿弥陀堂。		596
37	大鰐中	天和４年の長峰村絵図（部分）		イラスト図			601
38	大鰐中	天和４年の苦木村絵図（部分）		イラスト図	観音平にある観音堂の敷地		602
39	大鰐中	天和の駒木新田絵図（部分）		イラスト図	天和の絵図、庄屋源重郎天和４年３月６日書上げ此時屋敷11軒とある		607
40	大鰐中	天和の唐牛村絵図（部分）		イラスト図	天和の絵図、唐牛城のあった古館に観音堂地がある		610
41	大鰐中	天和の宿河原村絵図（部分）		イラスト図	天和の絵図の宿川原村　この絵図の２年前に代官所が建てられたという		615
42	大鰐中	天和の宿河原村絵図（部分）		モノ写真	天和の絵図に、宿川原村稲荷宮の奥山は鷹場で、鷹取りと飼育の御鳥屋が続いている		616
43	大鰐中	天和の虹貝村絵図（部分）		イラスト図	虹貝村天和の絵図に熊野新山堂はスキーコミニティー付近に、熊野宝量堂は清川から狐森入口付近にあった		619
44	大鰐中	天和の三目内村絵図（部分）		イラスト図	天和の絵図、現貴船神社地に薬師堂があり、六間に四間の立派な堂社である		644
45	大鰐中	天和の三目内村絵図（部分）		モノ写真	居土観音堂		647

46	大鰐中	天和の森山村絵図（部分）		イラスト図	天和の絵図に森山村は毘沙門八幡諏訪の三社宮形式で建立されていたという		671
47	大鰐中	天和の八幡館村絵図（部分）		イラスト図	天和絵図の八幡宮と観音堂付近、鯖石村は八幡館村の枝村であった（模写）		675
48	車力史	（牛潟村絵図）	天和4年3月3日	イラスト図	牛潟村家数15軒　内6軒本村屋敷7軒枝村屋敷　庄屋小四郎 昭和10年頃車力村役場書庫に保管中の古図を回想して作成した　工藤達		17
49	平賀上	天和四年大光寺村の絵図	天和4年3月16日	イラスト図	大光寺村中　家敷（数ヵ）46軒　内　本村屋敷40軒裏屋6軒　庄屋作右衛門		201
50	平賀上	天和四年本町村の絵図	天和4年3月15日	イラスト図	本町村　家数40軒　内　25軒本村屋敷　4軒同裏屋敷10軒枝村屋敷　1軒同裏屋敷　庄屋孫右衛門		202
51	平賀上	天和四年館田村の絵図	（天和4年）	イラスト図			203
52	平賀上	天和四年杉館村の絵図	（天和4年）	イラスト図			204
53	平賀上	天和四年大坊村の絵図	（天和4年）	イラスト図	「（裏書）沢内代官所大鰐組大坊村　原図青森県立中央図書館　所蔵昭和17年1月21日是ヲ転写　松露山人（別ニ書上帳アリ）」		205
54	平賀上	天和四年原田村の絵図	天和4年2月27日	イラスト図			206
55	平賀上	天和四年岩館村の絵図	天和4年3月21日	イラスト図	「嘉永六癸丑年四月当組御役所より此図書を拝借之上写置もの也　天和四年より嘉永六年迄百七十年に成ル此年天和四年之岩館村□別帳書写添置もの也　尤大切ニ可致事　九代　斉藤□左衛門繁譽　取持□　三男百次郎写□」「尓時天保三壬辰年七月十九日　勘定所地方席御借用之上写置もの也　当時尾崎組　御代官　吉村弁司判　築館紋次郎判　手代町居村　今井文次郎判仮手代尾崎村　八木橋忠兵衛判　岩館村庄屋　午之助判」 岩館邑　家数20軒　内　10軒本町屋鋪　1軒裏屋　8軒枝村屋鋪　1軒裏屋　庄屋弥助		207
56	平賀上	天和四年新館村の絵図	（天和4年）	イラスト図			208
57	平賀上	天和四年唐竹村の絵図	（天和4年）	イラスト図			209
58	平賀上	天和四年広船村の絵図	（天和4年）	イラスト図			210
59	平賀上	天和四年小国村の絵図	（天和4年）	イラスト図			211
60	平賀上	天和四年切明村の絵図	（天和4年）	イラスト図			212
61	平賀下	天和四年尾崎村の絵図	天和4年3月16日	イラスト図	尾崎村　家数86軒　内　15軒抱やしき　18軒壱年作やしき　42軒給人やしき　2軒裏屋　10軒新田やしき庄屋万右衛門 大光寺代目町　家数86軒　内　15軒抱屋敷　18軒壱年作やしき　42軒拾年やしき　2軒裏屋　拾軒新田やしき　庄屋万右衛門		1125

62	平賀下	天和四年平田森村の絵図	天和4年3月11日	イラスト図	平田森　家数合14間　内　10間本村　4間枝村　庄屋権兵衛　五人組太左衛門　〃作十郎　「原図県庁所蔵昭和28年10月謄写」 平田森村　家数合14軒　内　10軒本村　４軒枝村　庄屋権兵衛　五人組太左衛門　作十郎		1126
63	平賀下	天和四年吹上村の絵図	天和4年2月26日	イラスト図	「吹上村　縦3尺9寸5分　横2尺9寸6分」　家数13軒　本村屋敷　庄屋忠左衛門	原図3尺9寸5分×2尺9寸6分	1127
64	田舎上	天和の高日（樋ヵ）村絵図	天和4年3月7日	イラスト図	高樋村　家数21軒　内　11軒本村屋敷　2軒裏屋　6軒枝村屋敷　2軒同裏屋　庄屋甚兵衛		265
65	田舎上	天和の垂柳村絵図		イラスト図	垂柳村　庄屋長右衛門　家数27軒　内　8軒御蔵屋共7軒一年作　13軒給人		266
66	田舎上	天和の上田舎館村絵図	天和4年3月晦日	イラスト図	上田舎館村　家数42軒　47軒庄屋御蔵共　29軒一年作給人　1軒山伏　5軒裏家　庄屋孫右衛門		267
67	田舎上	天和の本田舎館村絵図	天和4年3月5日	イラスト図	本田舎館村　庄屋孫左衛門　家数33軒　内　8軒御蔵屋敷共　2軒御給人　3軒裏屋		268
68	田舎上	天和の諏訪堂村絵図	天和4年3月10日	イラスト図	家数7軒　庄屋品左衛門書上		
69	田舎上	天和の大根子村絵図		イラスト図			
70	田舎上	天和の豊蒔村絵図		イラスト図			
71	浪町史	大釈迦村天和書上絵図	天和4年	イラスト図			56
72	浪町史	柳久保地子新田天和書上絵図	天和4年2月20日	イラスト図	庄屋孫四郎		57
73	浪町史	徳才子村天和書上絵図	天和4年2月20日	イラスト図			60
74	浪町史	高屋敷村天和書上絵図	天和4年2月20日	イラスト図	庄屋勘助		61
75	浪町史	杉沢村天和書上絵図	天和4年2月20日	イラスト図	庄や助左エ門・新庄や仁兵エ		63
76	浪町史	王余魚沢村絵図	不明	イラスト図			65
77	浪町史	九日町村天和書上絵図	天和4年2月20日	イラスト図	庄屋嘉右エ門・次郎左エ門		71
78	浪町史	四日町村絵図	不明	イラスト図			74
79	浪町史	本郷村天和書上絵図	天和4年2月27日	イラスト図	庄屋惣右エ門		79
80	浪町史	赤茶村天和書上絵図		イラスト図			82
81	浪町史	女鹿沢村天和書上絵図	天和4年2月20日	イラスト図	庄屋六左エ門		83
82	浪町史	本女鹿沢地子新田天和書上絵図	天和4年2月22日	イラスト図	庄屋三右エ門・甚十郎		85
83	浪町史	備後地子新田天和書上絵図	天和4年2月23日	イラスト図	庄屋次左エ門		86
84	浪町史	下十川村天和書上絵図	天和4年2月20日	イラスト図	庄屋善右エ門		88
85	浪町史	増館村天和書上絵図		イラスト図			90
86	浪町史	杉白銀村天和書上絵図	天和4年2月27日	イラスト図			92
87	浪町史	上江三枚村天和書上絵図		イラスト図			93
88	浪町史	吉野田村天和書上絵図		イラスト図			97

89	浪町史	石沢村天和書上絵図	貞享元年3月20日	イラスト図	庄屋市左エ門		100
90	野村誌	天和四年二月廿七日白銀村書上絵図		イラスト図			第二図
91	女村誌	天和四年赤茶村附近絵図		イラスト図			口絵
92	女村誌	天和四年二月下十川村附近絵図		イラスト図			口絵
93	女村誌	天和四年女鹿沢領図		イラスト図			口絵
94	女村誌	備後新田村絵図	天和4年2月23日	イラスト図			口絵
95	女村誌	天和四年増館村附近絵図		イラスト図			口絵
96	女村誌	天和四年二月松枝村絵図	天和4年2月	イラスト図			口絵
97	浪町Ⅰ	九日町村天和絵図写	天和4年2月22日	モノ写真	1鋪、浪岡町中世の館（五本松財産区旧蔵）	120×118	16 絵図13
98	浪町Ⅰ	四日町村天和絵図写	天和4年2月25日	モノ写真	1鋪、浪岡町中世の館（五本松財産区旧蔵）	120×118	17 絵図14
99		天和4年中野略図の写	「青森県庁保存セルモノ昭和六年八月写之」とあり。		個人蔵		
100	浪町Ⅰ	天和四年絵図面村控写（杉沢村）	明治20年12月5日		1枚、五本松財産区文書		
101	浪町Ⅰ	五本松村御新田村天和四年の絵図(写)			1枚、五本松財産区文書		
102	浪町Ⅰ	四日町村天和四年の絵図（写）			1枚、五本松財産区文書		
103	浪町Ⅰ	九日町村天和四年の絵図（写）			1枚、五本松財産区文書		
104	浪町Ⅰ	四日町村天和四年の絵図（写）			1枚、五本松財産区文書		
105	浪町2	天和の九日町村絵図写（浪岡城部分）		カラー写真			3
106	浪町2	天和の絵図（九日町村）		モノ写真			220
107	浪町2	天和の絵図（四日町村）		モノ写真			221
108	平舘	（石崎村天和絵図）		モノ写真			214

自治体史略名一覧

No.	略　名	書誌名他	巻　号	発行年
1	「平賀上」	『平賀町誌』	上巻	1985
2	「平賀下」	『平賀町誌』	下巻	1985
3	「田舎上」	『田舎館村誌』	上巻	1997
4	「五通１」	『五所川原市史』	通史編１	1998
5	「藤崎１」	『藤崎町誌』	第一巻	1996
6	「藤崎４」	『藤崎町誌』	第四巻	1996
7	「岩町誌」	『岩木町誌』		1972
8	「大鰐中」	『大鰐町史』	中巻	1995
9	「市浦２」	『市浦村史』	第２巻	1996
10	「車力史」	『車力村史』		1972
11	「常史Ⅰ」	『常盤村史』	史料編Ⅰ	1999
12	「常村誌」	『常盤村誌』鈴木政四郎編		1958
13	「竹館誌」	『竹館村誌』葛西覧造・鈴木政四郎編著		1953
14	「浪町史」	『浪岡町史』葛西善一著		1986
15	「野村誌」	『野沢村誌　全』葛西覧造編		1934
16	「女村誌」	『女鹿沢村誌』葛西覧造著		1940
17	「浪町Ⅰ」	『浪岡町史』	別巻Ⅰ	2002
18	「浪町２」	『浪岡町史』	２巻	2004
19	「平舘」	『平舘村史』		1974

津軽氏にみる戦国の城館・元和の城館
—種里・大浦・堀越そして亀ケ岡—

関　根　達　人

はじめに

15世紀末、三戸南部氏による領国支配強化は津軽にも及び、延徳３年（1491）には南部久慈氏の一族光信が下国安藤氏への押さえとして、西浜種里城に遣わされた。光信は、文亀２年（1502）には、岩木山の東南麓に大浦城を築城、嫡男盛信を置いたという。盛信は、津軽郡代として奥大道を押さえるべく津軽平野の南の入口に築かれた石川城に拠った南部高信に従い、三戸南部氏による津軽経営の主翼を担った。盛信の子孫は、政信、為則と続き、永禄10年（1567）には、久慈氏を出自とする平蔵が養子に入り、為信を名乗って大浦城主となった。元亀２年（1571）、為信は石川城を急襲、南部高信を自害に追い込んだのを手始めに南部氏に反旗を翻し、独立への歩みを開始した。天正19年（1591）、秀吉から領地高３万石を安堵された為信は公式に津軽氏を名乗り、文禄３年（1594）には、本拠を大浦城から堀越城に移した。

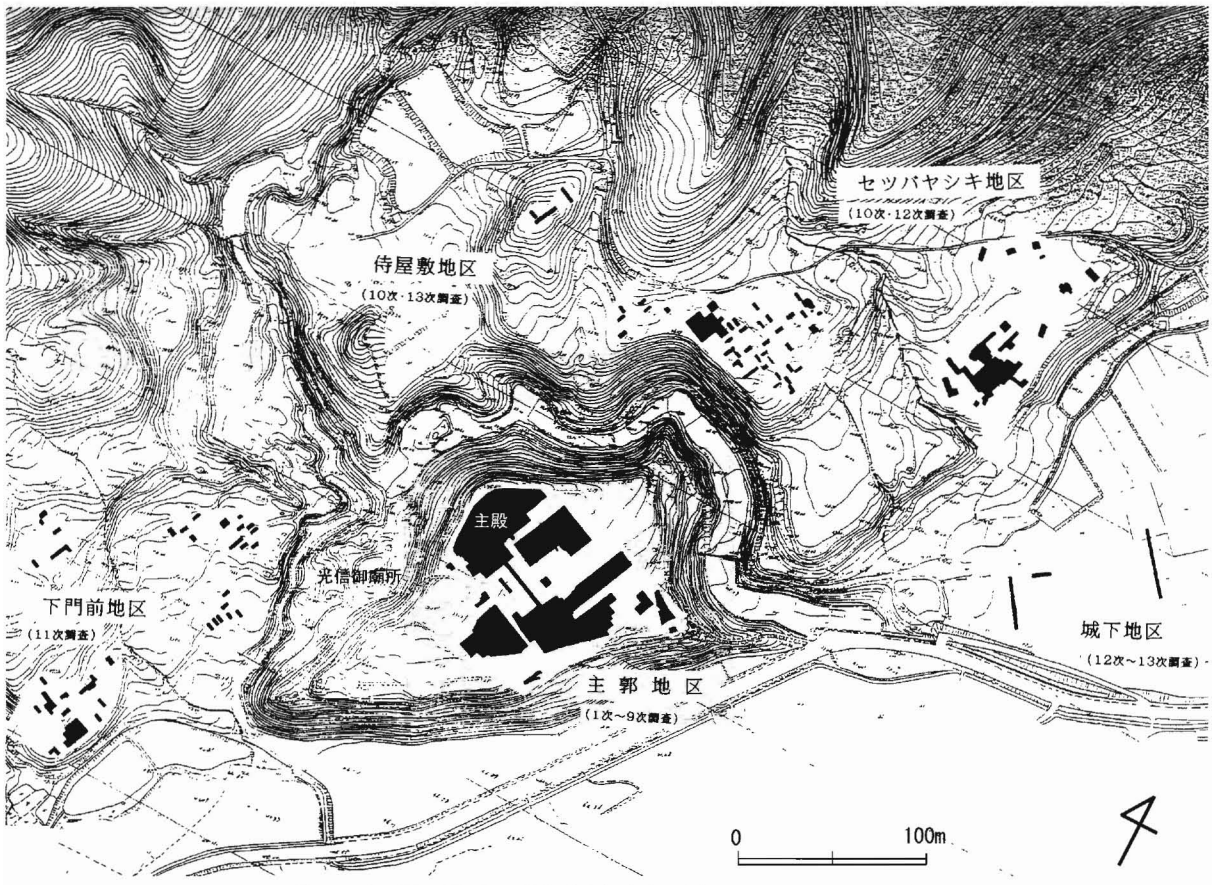
津軽地方における戦国末期の城館については、「津軽編覧日記」１（八木橋文庫）の「古城・古館の覚」に基づき長谷川成一氏が検討を行っており、「取り合」い・「征伐」・「伐取」をキーワードに、津軽（大浦）氏による領内掌握過程がおおよそ判明している（長谷川成一 1993）。古くから津軽（大浦）氏の居城は、『愚耳旧聴記』・『津軽一統志』・「津軽編覧日記」・「封内事実秘苑」などの史料により、種里城（青森県西津軽郡鰺ケ沢町）、大浦城（青森県中津軽郡岩木町）、堀越城（青森県弘前市）と移動したとされてきたが、近年、これらの城跡の発掘調査が進み、史料との対比が可能となりつつある。

筆者は、津軽（大浦）氏が本城とした種里・大浦・堀越の３城跡出土の陶磁器に基づき、各城館の「格」と年代を検討したことがある（関根達人 2004）。また、弘前に城が定まった後の元和年間に築城が計画された亀ケ岡城に関して、古絵図と現地踏査に基づき、その実態解明を試みた（関根達人 2005）。本稿では、上記論考に基づき、戦国期における津軽（大浦）氏の拠点の移動と、近世前期の新田開発と城館との関連性について論じる。

1　出土陶磁器からみた、戦国期、津軽（大浦）氏関連城館の格と年代

【種里城跡】（鰺ケ沢町教育委員会 1990・93・95・98、中田書矢 2002a・2002b・2003、中田ほか 2002）〈第１・２図〉

種里城跡から出土する最も古い陶磁器群（Ⅰ期）は、青磁酒会壺・古瀬戸の天目碗など伝世した可能性の高い威信財を除けば、年代的には延徳３年（1491）の築城と特段矛盾しない。尻八館出土資料（青森県立郷土館 1981）が比較的近いと考えられるが、それに比べ質・量ともに下位に位置づけられる。続くⅡ期の資料は、量的に最も充実している。大浦築城を契機として、本拠が種里城から大浦城へと移ったのであれば、陶磁器の出土量は減少していてもよいはずだが、実際にはⅠ期よりⅡ期のほうが圧倒的に多い。勿論、Ⅰ期とⅡ期の時間幅が異なる点は考慮しなければならないが、城の最盛期がⅠ期で終わるとは考えがたい。主曲輪のⅡ期の陶磁器と浪岡城跡内館の当該期の資料（工藤清泰ほか 1989）を

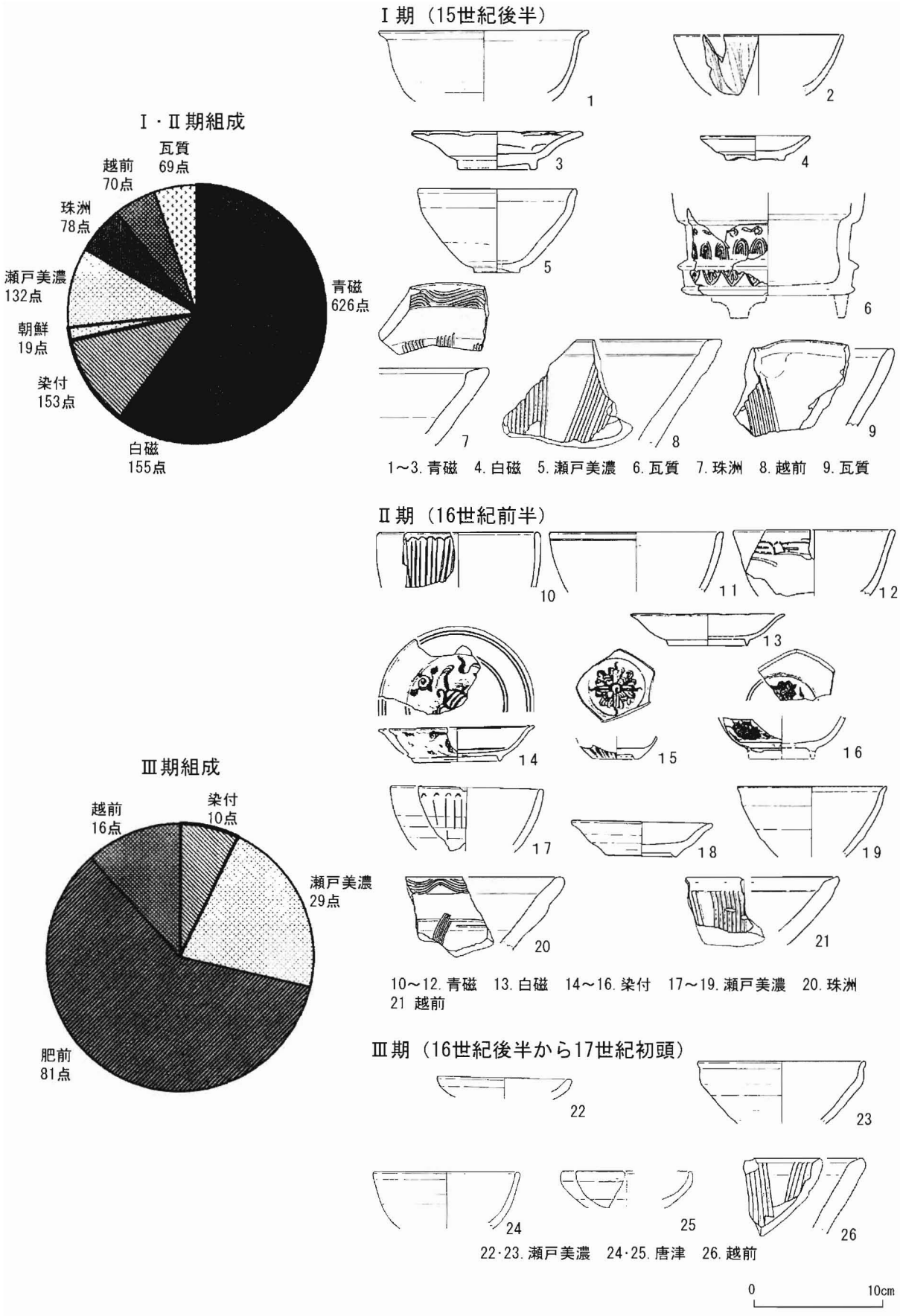


第1図　種里城跡と発掘調査地点（中田ほか 2002より）

比較すると、質・量ともに浪岡城跡のほうが優位である。主曲輪では、Ⅲ期（16世紀後半～17世紀初頭）の陶磁器はⅡ期に比べ激減する。Ⅲ期の陶磁器は、主曲輪の北東、現在の種里集落寄りのセツバヤシキから多く出土する。当該時期には、種里城は津軽氏の本城としての位置を完全に失い、より城下に近い地区に「由緒の地」の管理と西浜支配を兼ねた施設が設けられたのであろう。

【大浦城跡】（岩木町教育委員会 1996）〈第3・4図〉

大浦城跡から出土する最も古い陶磁器群（Ⅰ期）は、古瀬戸の天目碗や瓦質風炉など伝世した可能性の高い威信財を除けば、年代的には史料にある文亀2年（1502）の築城と特段矛盾しない。しかし、城の性格と最盛期に関しては、これまでの通説と出土陶磁器の分析結果とは大きく異なる。『前代歴譜』には「文亀二年壬戌、花輪郡賀田郷ニ城築、是ヲ大浦ノ城ト云、嫡男盛信ヲシテ居住セシム」とあるのみで、どの段階で大浦城が本城となったのか触れられていないが、これまで大浦城の最盛期は、為信が大浦城主となった16世紀後半と見なされてきた。しかし大浦城跡出土陶磁器の消長は、基本的には種里城跡に一致する。出土陶磁器から判断する限り、大浦城築城後も種里城の地位が極端に低下するような現象は見いだしがたい。16世紀第1四半期は、種里城跡でも大浦城跡でも遺物量が多く、津軽（大浦）氏の勢力が急成長した時期と見なされる。大浦城は、まさにそうした時に、津軽平野部の経営にも乗り出そうとする積極的な戦略により築かれたのである。しかし陶磁器の消長からは、津軽（大浦）氏のこの戦略がその後順調に推移したとは思えない。種里城跡でも大浦城跡でも16世紀中葉の陶磁器は僅かである。この時期、津軽（大浦）氏の勢力そのものが低調であった可能性が高い。そこで思いだされるのが、天文2年（1533）



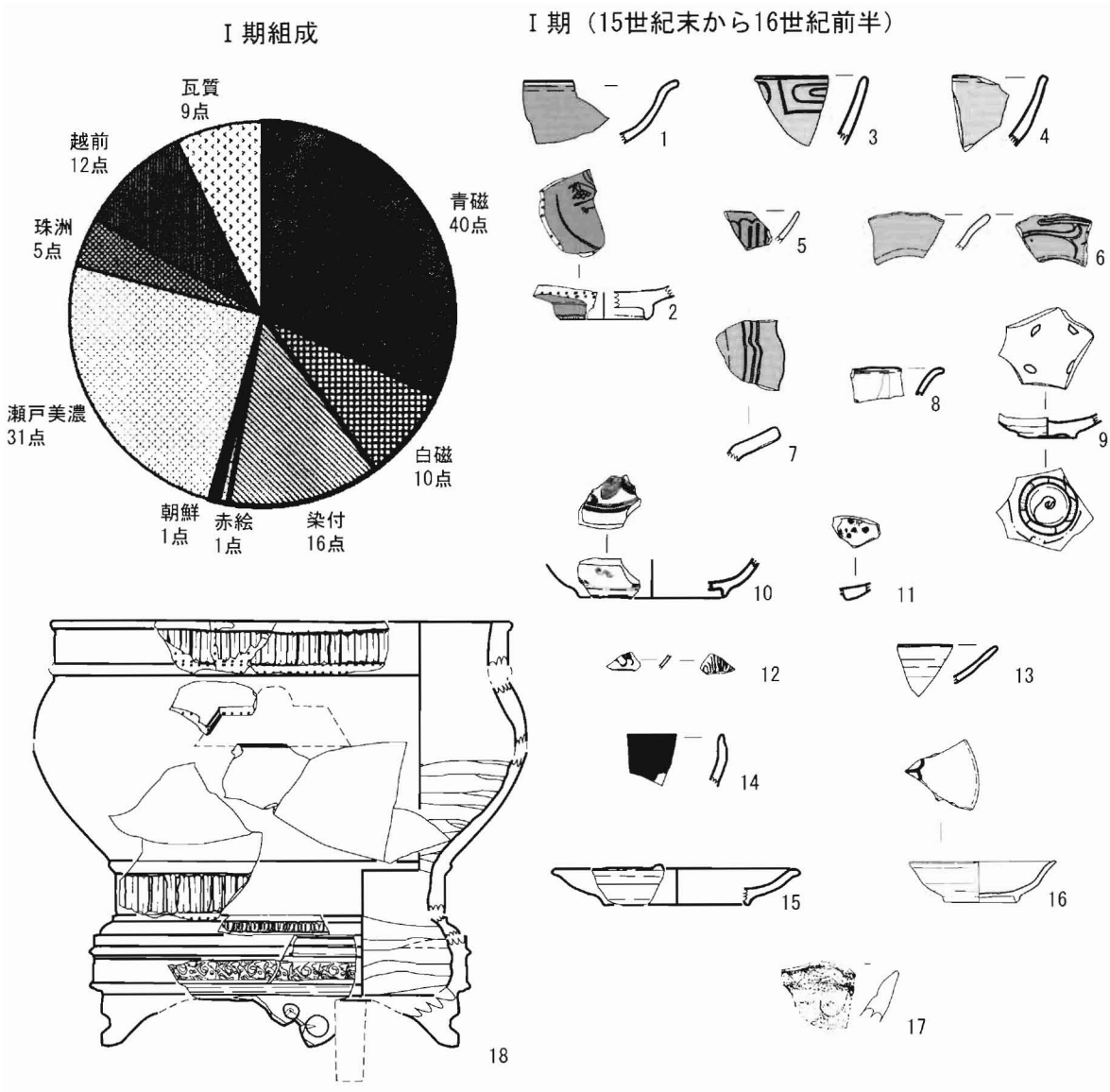
第２図　種里城跡主郭地区出土陶磁器

第３図　大浦城跡と発掘調査地点

頃におこったとされる津軽の反乱である。反乱の中心は大光寺城主「津軽殿」や藤崎城主安藤氏ら津軽の領主層で、南部氏による津軽支配の強化に対する抵抗といえる。大浦盛信は、この乱の鎮圧後、津軽郡代に任じられ石川城に拠った南部高信のもと南部氏による津軽支配において重要な役割を果たしており、津軽の反乱時には南部氏の指揮下にあった。津軽の反乱は、南部氏側に立つ津軽（大浦）氏にも深刻な影響を与えた可能性が高い。

ところで、佐々木浩一氏に拠れば、大浦城は東北北部の中世城館では極めて珍しい「曲輪を重ねる」タイプの城館であり、近世城郭の築城法をいち早く採り入れた城と評価される（佐々木浩一 2002）。青森県内の中世城館で「曲輪を重ねる」タイプの城館は大浦城跡と堀越城跡の２箇所のみである。問題は、どの段階で大浦城跡が現在残るような城構をとるようになったかである。この曲輪配置は織豊系城郭に由来すると考えられるが、大浦氏がそのような築城法を学ぶ機会を得たのは、史料により具体的な月日は確認し得ないが小田原に参陣し、次いで北出羽の大名衆とともに為信が秀吉への謁見のため上洛を果たした天正18年（1590）以降でしかあり得ない。それは長く見積もっても大浦城から堀越城へ転居したとされる文禄３年（1594）のわずか２～３年前のことであり、大浦城は大規模な改築後ほとんど使用されなかったことを意味する。大浦城跡出土陶磁器のなかに16世紀後葉のものが極めて少ない理由は、天正末年から文禄初年頃に行われた城の大改造と、その直後実施された堀越城への転居にあるのかもしれない。

【堀越城跡】（弘前市教育委員会・堀越城跡発掘調査委員会 1978a・b、弘前市教育委員会 1999～2005、菊池信吾 2002・2003）〈第５・６図〉



1～7. 青磁　8･9. 白磁　10･11. 染付　12. 赤絵　13. 朝鮮　14～16. 瀬戸美濃　17. 越前　18. 瓦質

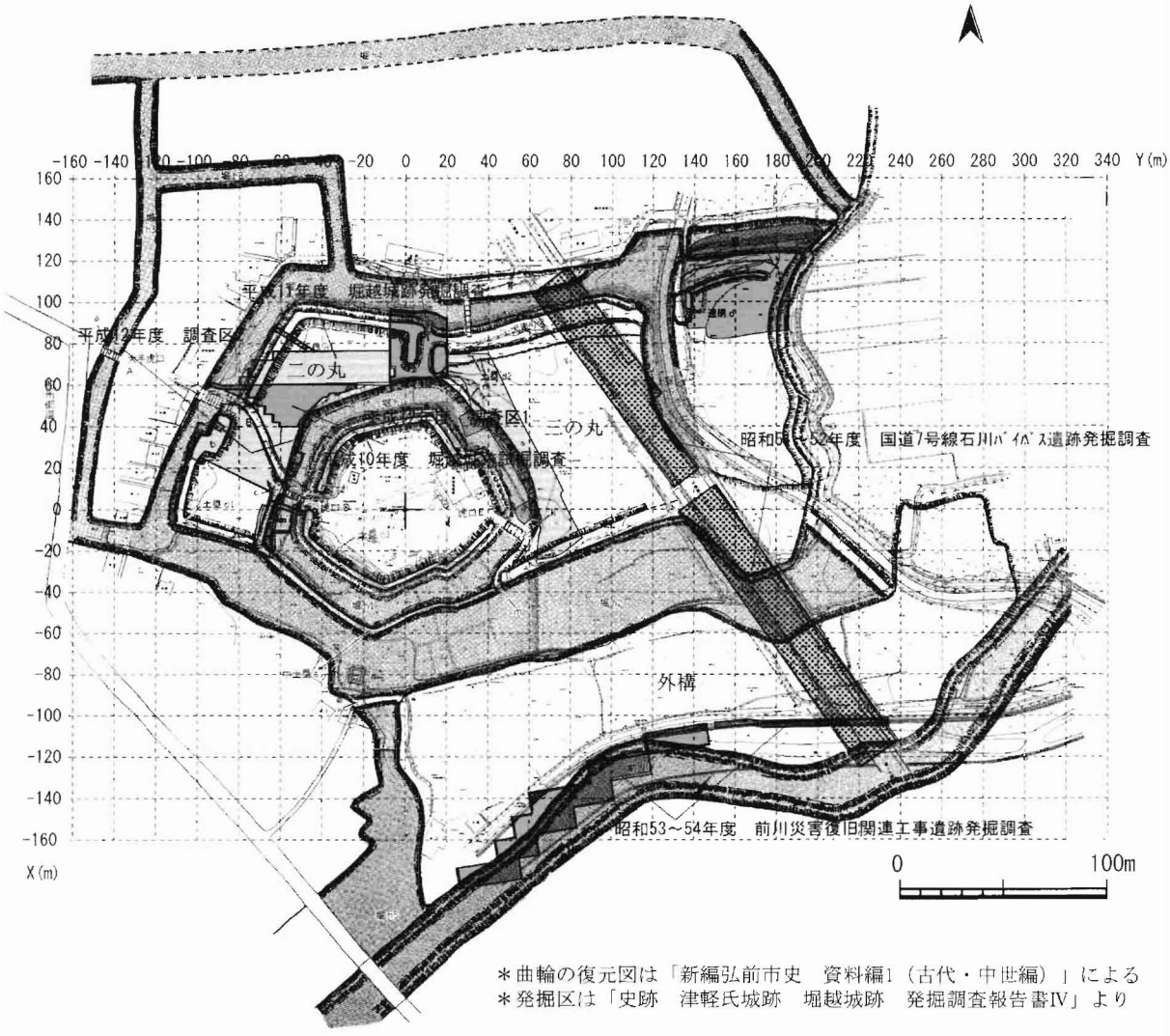
Ⅱ期（16世紀後半から17世紀初頭）

19. 染付　20. 瀬戸美濃　21･22. 唐津

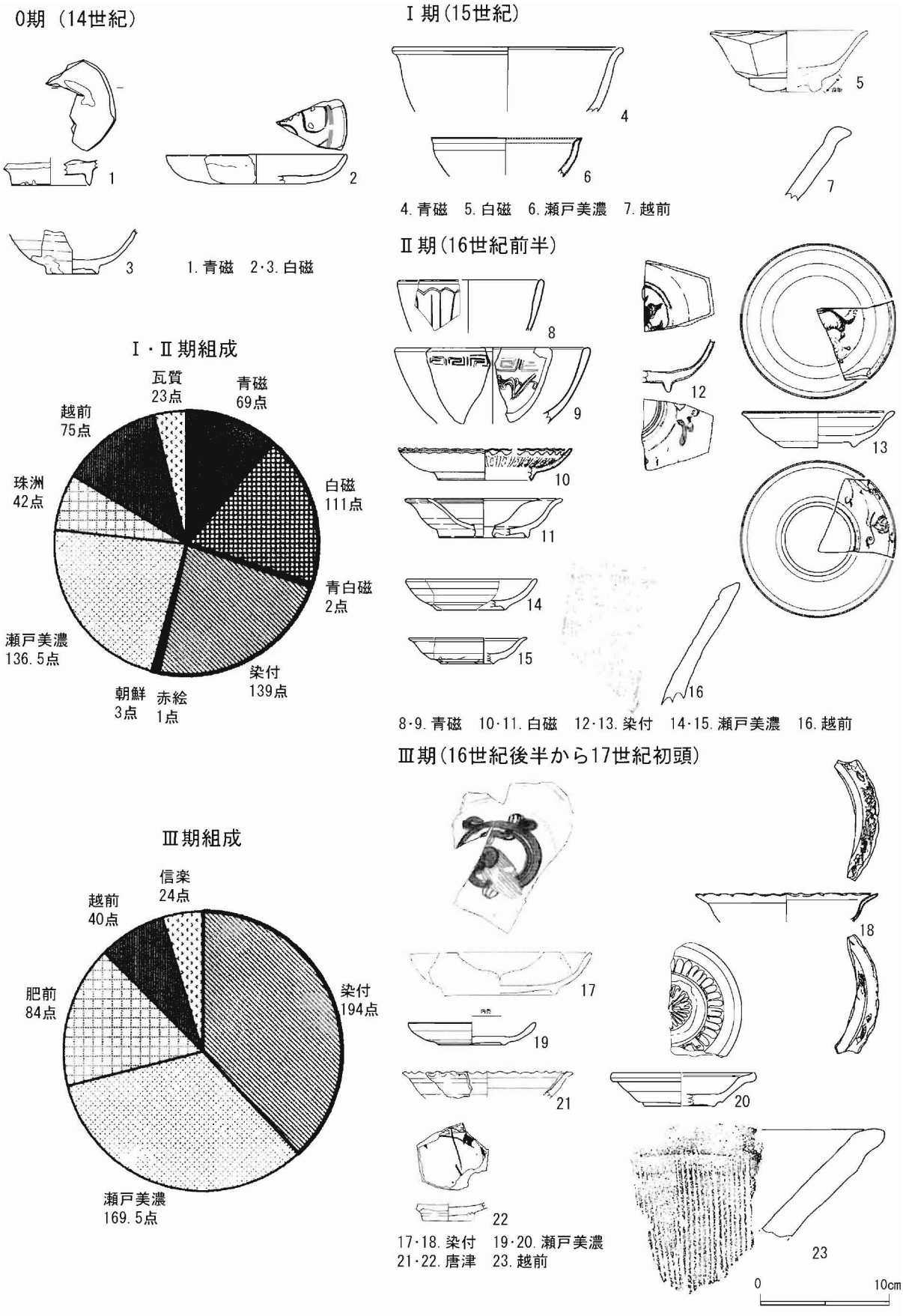
0　10cm

第４図　大浦城跡出土陶磁器

堀越城跡の出土陶磁器で最も古い14世紀代の陶磁器群（０期）は、建武４年（1337）７月「曾我貞光申状案」（遠野南部家文書）に登場する、曾我太郎貞光が築いた「堀越楯」に由来する可能性がある。続くⅠ期の資料は断片的ながら、15世紀代にこの場所が城館として利用されていたことを示している。この時期の堀越については文書などの記載もなく、不明といわざるを得ない。Ⅱ期とした16世紀前半の陶磁器は、同時期の種里城跡や大浦城跡と似た構成をとる。これまで堀越城に関しては、津軽（大浦）氏の本城となった文禄３年（1594）から高岡（弘前）城へ転居する慶長16年（1611）までのことが問題にされてきたが、出土する陶磁器からみて、16世紀前半の段階で既に堀越に、津軽（大浦）氏の本城である種里城や大浦城クラスの城館が存在していた可能性は高い。Ⅲ期とした16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器群は量も多く、年代的にも概ね堀越城が津軽（大浦）氏の本城として使われていた時期に相当する。弘前市教育委員会により平成16年度に行われた本丸跡の発掘調査では、整地層を挟んで中世から近世の生活面が３面確認され、最上面からは近世大名津軽氏の本城と呼ぶにふさわしい大規模な礎石建物跡が検出されている（弘前市教育委員会 2005）。



第５図　堀越城跡と発掘調査地点



第6図　堀越城跡出土陶磁器

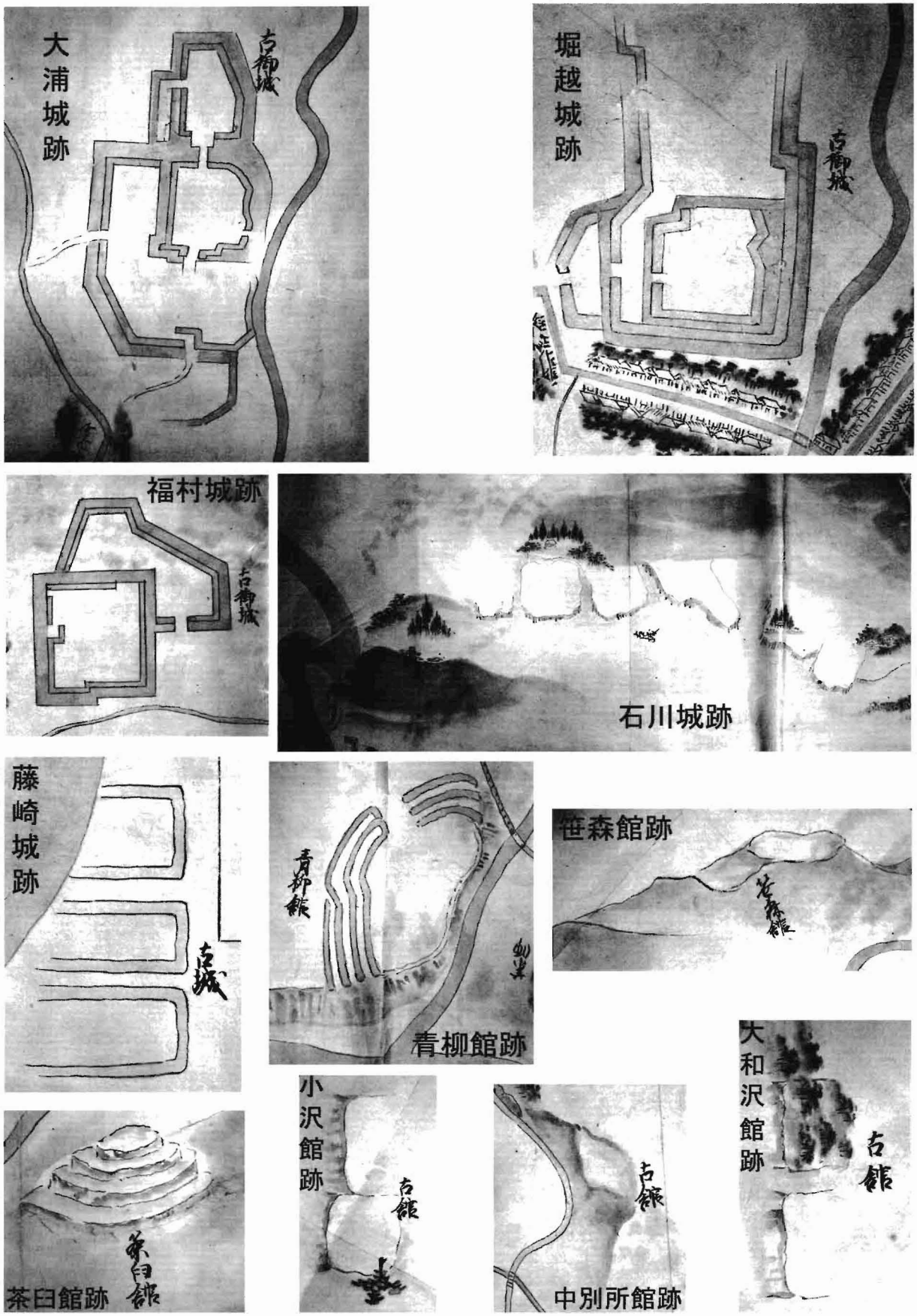
弘前藩の官撰史書である『津軽一統志』には、元亀２年（1571）、大浦為信が石川城の南部高信を攻撃する際、「町飛鳥の屋敷」（「堀越の旧城」）を修築したとの記述がある。また『永禄日記』には、天正15年（1587）正月、為信が堀越城を修築したとの記述が見られる。文禄３年（1594）の為信による大浦城から堀越城への転居に先立ち、すでに津軽（大浦）氏にとって堀越城は、大浦城に匹敵する重要な位置を占めていた可能性が高い。大浦城跡から16世紀後半の陶磁器がごく僅かな量しか出土しない点を重ね合わせれば、大浦城から堀越城への本拠の移動は文禄３年の段階で突然なされたのではなく、それ以前から実質的に堀越城が津軽氏の本城と化していたという既成事実があったものと推察される。『津軽一統志』が伝える文禄３年の大浦城から堀越城への「引越」は、豊臣政権の傘下に入り、対外的に堀越城を本城とするとの表明ができる環境がこの頃ようやく整ったことを意味しているのであろう。

２　弘前築城と領内の古城館跡

奥羽地方でも、天正18年（1590）豊臣政権の奥州仕置による一国一城制下命、翌年の「奥郡仕置」を中軸とする再仕置を受けて、城破りと「簡要の城」の番城化が進むが、八戸市根城の発掘調査事例が示すように、「不入城」の破却（城破り）は不徹底で、多くの城館が補修すれば再度利用可能な状況下におかれた。南部領の場合、天正20年（1592）の「南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上之事」写（『聞老遺事』等所収）から判るように、「不破城」が領内各所に散らばっており、それらは豊臣政権下の大名として福岡城を拠点に難しい領国経営に当たっていた南部氏の番城として重要な意味を持っていた。徳川政権へ移行後も、奥羽の諸大名には元和の一国一城令を命じる幕府年寄衆連署奉書が届くことはなく、従来は「出羽奥州の脇城計、其まま可差置」（「細川家記」元和元年閏６月13日条『大日本史料』第一二編之二一所収）との処置がとられたと見られてきたが、こうした見かたに対する反論もある（長谷川成一 1994）。

津軽領の場合、豊臣政権下天正期に行われた城の破却について具体的な様相は判らないが、神山仁氏は、正保の国絵図作成時に幕府へ届けられた７箇所の古城、すなわち深浦（元城）、鰺ケ沢（種里）、藤崎、堀越、八幡（大浦）、大光寺が「存置」された城との見方を示す（神山仁 2001）。しかし南部と異なり津軽では、居城以外の城館の破却と家臣団の城下町への集住が、慶長15年（1610）の弘前築城により実現された。「封内事実秘苑」２（八木橋文庫）が「慶長十五年三月五日、（中略）在々之古館申ニ不及、大光寺・浅瀬石・黒石等之館引き取候て、御城築ニ入申候」と伝えるように、弘前開府に際しては、領内に存置されていた城館が解体され、弘前城や城下の寺院に再利用された(註)。

「弘前并近郷之御絵図」（青森県立郷土館蔵）は、貞享２年（1685）３月の年紀を有し、弘前城を中心に城下とその近郊、平野部に位置する村落・河川・道を彩色により描いた絵図である。描かれている範囲は、北は「鰺ケ沢海道」沿い高杉村から「青森海道」の藤崎周辺まで、南は現在の弘前市南部の石川と久渡寺を結ぶラインまで、東は平川の東岸沿いの村々まで、西は津軽平野西縁までである。この絵図の特徴は、村落・河川・道以外に城館跡を描いている点にあり、その数は11箇所にも及ぶ。城館跡は、文字による名称と城跡を示す絵によって描き分けられており、名称と表現手法の間には対応関係が認められる（第７図）。すなわち、「古御城」と表記された大浦・堀越・福村の３城跡は、堀と土塁による



第７図　「弘前并近郷之御絵図」（青森県立郷土館蔵）にみる弘前付近の城館跡

囲郭が認められる。前述のように、大浦城と堀越城は、津軽氏がかつて本拠とした城であり、福村城も津軽為信が津軽統一に乗り出した天正２・３年（1574・75）頃、戦略的拠点として築かれた津軽氏ゆかりの城である。それに対して戦国期に津軽（大浦）氏の直接的な管理下になかった他の城館跡は、「古城」・「○○館」」「古館」のように「御」の字を省いた名称で表記されている。このうち、「古城」と表記された藤崎城跡と石川城跡は、前者が堀に囲まれた曲輪を並列し、後者は７ないし８もの平場を横一列に並べるという違いはあるが、ともに規模の点で「○○館」」「古館」より遙かに勝っている。「城」と「館」は絵図の中で明らかに使い分けられている。

「弘前并近郷之御絵図」に描かれた堀越城跡は、堀と土塁の痕跡をとどめているが、承応２年（1653）に編まれた『津軽領道程帳ひかえ』には「堀越村之内ニ古城有、唯今ハ田畠ニ罷成、土手堀ノ躰少御座候」とあり、17世紀中頃には農地化が進んでいる。しかし天和４年（1684）の「堀越村書上絵図」や貞享４年（1687）の「陸奥国津軽郡平賀庄堀越村御検地帳」が示すように、17世紀後葉の段階でも本丸跡だけは例外で、稲荷堂や長床といった宗教施設のある除地となっており、津軽家の祖南部光信の「廟所」のある種里城跡同様、由緒の地として特別視されていたようだ。一方、大浦城の場合、西の丸跡に火薬庫が設けられ、明和７年（1770）６月28日の爆発事故後も幕末まで引き続き焔硝守役が置かれている。

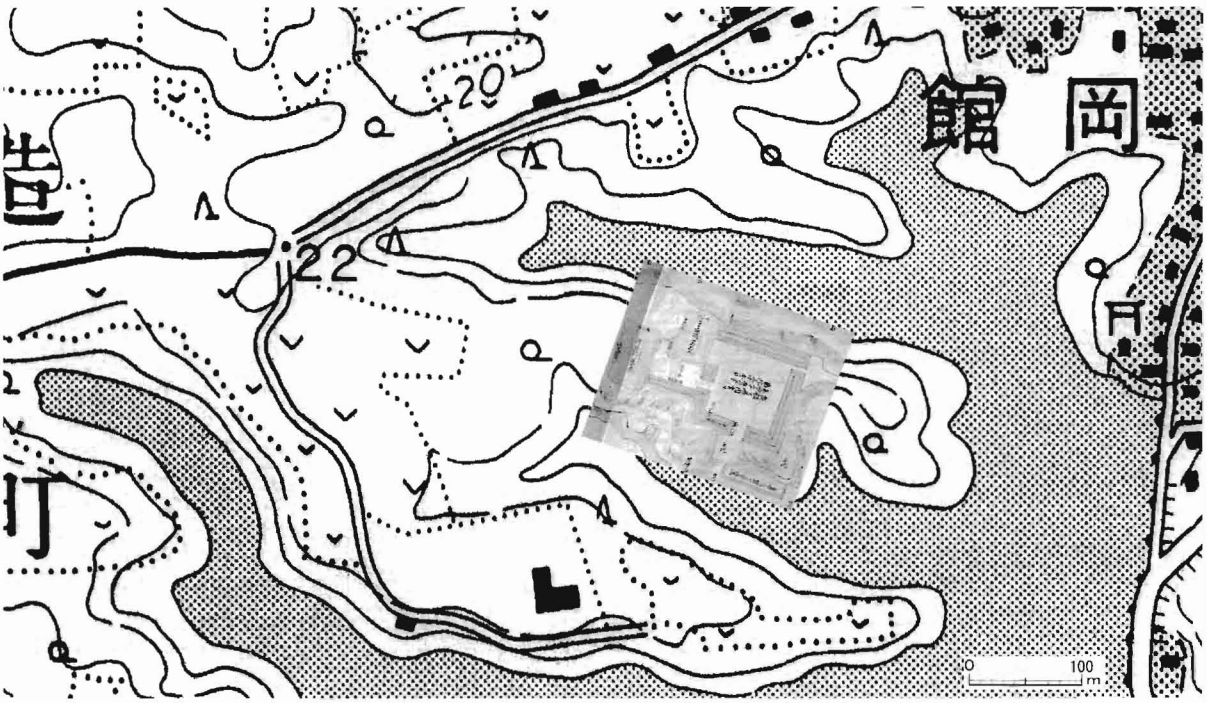
３　亀ケ岡城築城と新田開発

津軽地方では、元和期以降、津軽氏の居城弘前城以外の二箇所で城館が新たに作られた。ひとつは「弘前并近郷之御絵図」に４段の平場が重層的に描かれた青柳館であり、もう１箇所は、弘前城から北西に直線距離にして約32km、日本海に沿う屏風山砂丘の西縁に位置する亀ケ岡城である。

青柳館は、弘前城の南西約4km、岩木川を臨む河岸段丘上に立地する。承応元年（1652）、三代藩主津軽信義の別荘として新設されたが、『新撰陸奥国誌』によれば火薬庫や焔硝蔵が置かれたこともあった。

亀ケ岡城は、青森県西津軽郡木造町亀ケ岡字近江野沢にあり、十三街道に沿った亀ケ岡集落の南西、大溜池に突き出た丘陵上に立地する（第８・９図）。『津軽一統志』や『津軽編覧日記』などの史書によれば、元和８年（1622）７月上旬、十三湊を巡検した二代藩主津軽信枚は、この地を城地に見立、森内左兵衛と大湯彦右衛門を奉行に普請が始まったが、途中で幕府より出されていた一国一城令に抵触する恐れがあるとして、築城中止になったと伝えられる。亀ケ岡城は、未完成に終わり実際に機能しなかったと考えられてきたため、これまで本格的に検討されたことはなかった。亀ケ岡城に関する史料は、国立史料館所蔵の宝永５年（1705）年の年紀を有する「亀ケ岡古館御茶屋図」（青森県教育委員会 1984）が知られてきたが、弘前市立図書館所蔵の「亀ケ岡古館御図」と「亀ケ岡御屋敷構図」からより詳細な情報が得られる。

「亀ケ岡古館御図」は、天和３年（1683）４月朔日の年紀を有する、縦300cm、横366cmの彩色された絵図で、亀ケ岡古館を中心に十三街道沿いの村々や周辺の溜池群を描く。その範囲は、西は日本海岸まで、東は十三街道に沿って南北に流れる山田川まで、北は山田川が流れ込む田光沼まで、南は十三街道の菰槌集落までである。絵図には、亀ケ岡古館を



第８図　亀ケ岡古館跡の位置

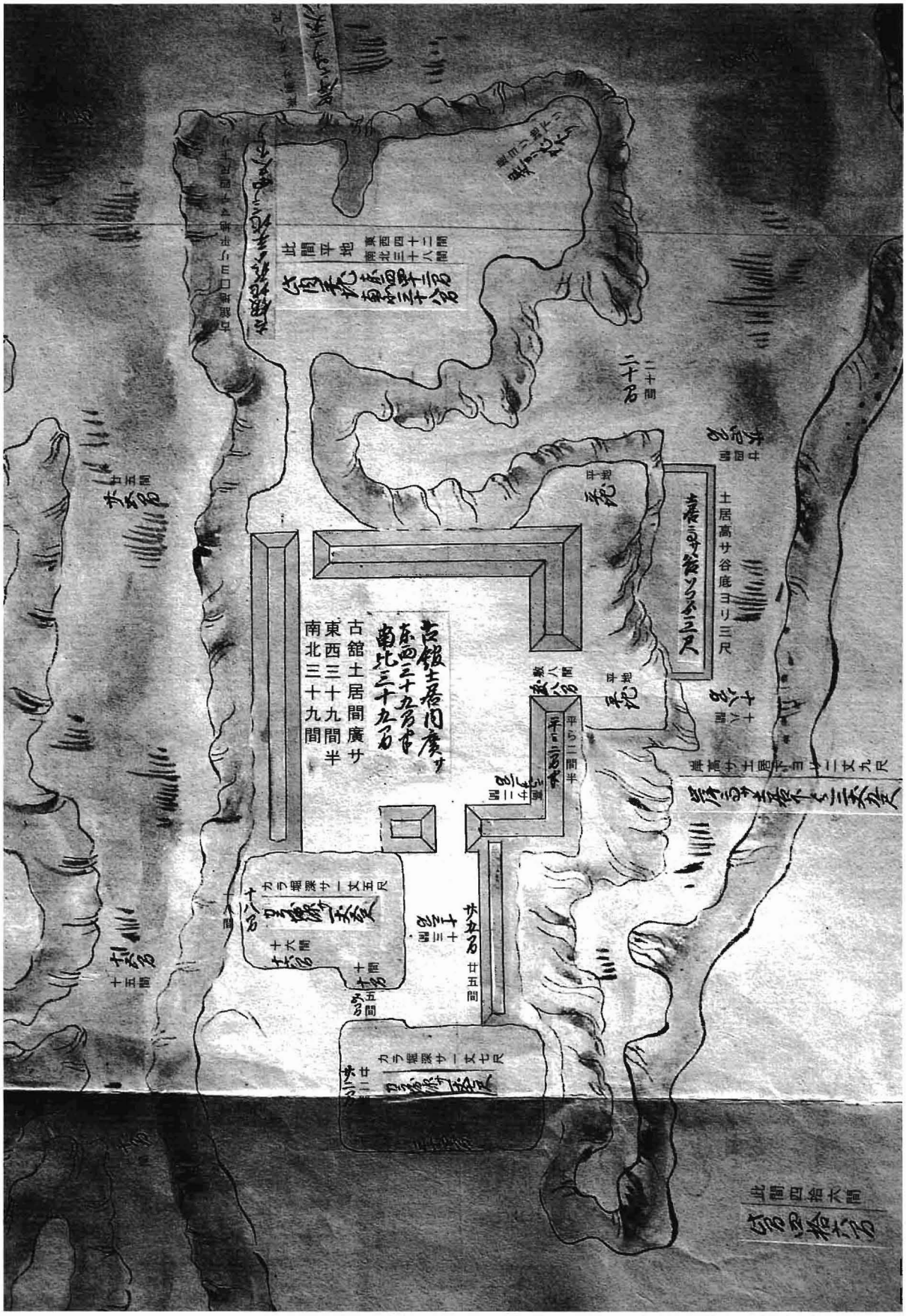
第９図　亀ケ岡古館跡の航空写真

国土交通省国土画像情報閲覧システム（写真整理番号CT0-75-20：昭和50年撮影）を加工使用

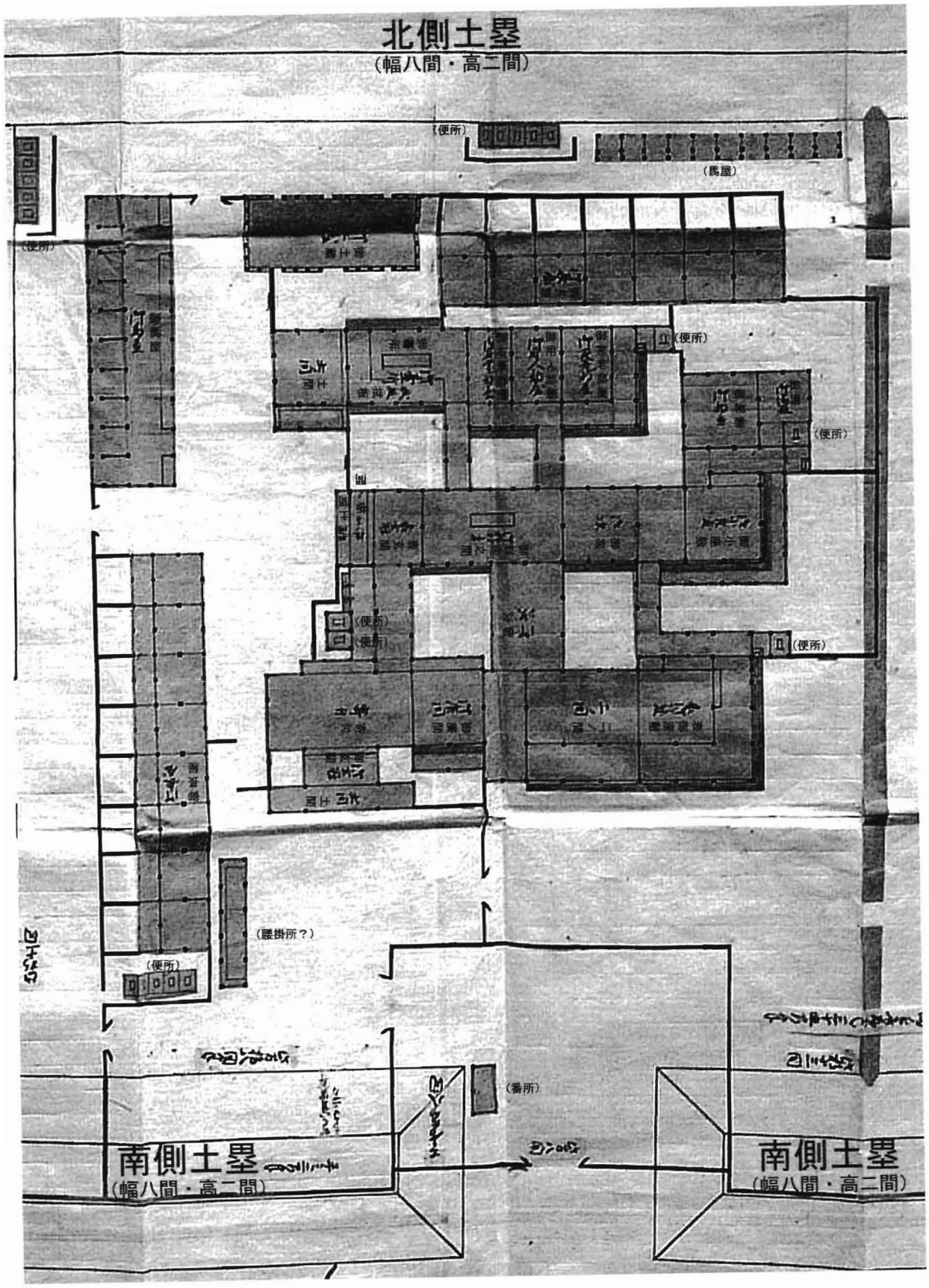
起点として弘前や鰺ケ沢、新田開発によって開かれた村や溜池までの距離を記した覚書がある。絵図に描かれた亀ケ岡古館は、後年大溜池として利用されることになる沼沢地に突き出た丘陵上に位置する。南北の沢の谷頭付近に２箇所、深さ５m 前後の空堀を食い違い状に配置して虎口とし、南側に幅約 22.5m、高さ約 3.6m の土塁で囲まれた約 70m 四方の方形の主郭がある。主郭の南には小規模な平場が２箇所、東には土橋を隔て主郭に匹敵する平場がある（第10図）。

一方、「亀ケ岡御屋敷構図」は年代が不明であるが、土塁や空堀の位置や規模は「亀ケ岡古館御図」に合致し、主郭と虎口周辺の建物群が座敷の名称から柱の配置に到るまで詳細に描かれている（第11図）。絵図を納めた袋には「亀ケ岡御屋敷構図　松田五郎左衛門」と書かれているが、松田五郎左衛門は、「亀ケ岡古館御図」にも登場することから、両者が作成された年代に大きな差はないと思われる。主郭は、大部分に建物が建てられており、南辺および西辺の土塁に沿った長屋・馬屋、長屋・土蔵からなる「詰人空間」と、その内側、主郭の中心部に位置する「御殿空間」からなる。「御殿」を構成する建物群は連結しているが、大きく３ブロックに分けられる。最も西側の建物は、「御家老部屋」・「御用人部屋」・「御右筆部屋」・「御臺所」といった実務機能を持っている。「表玄関」を有する中程の建物は、「土間」・「板ノ間」・「表玄関」・「御料理之間」・「御次」と続き、北側の最も奥まった部分に「御小座敷」・「御湯殿」・「御物重」があるが、この部分は藩主滞在の際の私的空間であろう。東側の建物は、「御玄関」を入ると、「寄付」・「御廣間」・「二ノ間」・「表座敷」と続き、公的な色彩が強い。御殿空間の北東隅に設けられた「表座敷」・「二ノ間」の北東には塀で仕切られた空閑地が広がっているが、そこはこれらの座敷に付随する庭であった可能性が高い。亀ケ岡城は普請が途中で停止されたとされており、絵図が設計図で、実際の建物を写したのではない可能性も完全には否定できない。しかし絵図の中で空堀に接する土塁が中途半端な形で描かれ、「土居築かけ九間半」と記されていることからみて、間取りが完全な形で描かれた建物群はほぼ完成していたと思われる。

これら２面の絵図から、亀ケ岡城に対して次のような評価を与えることができる。城構については、複郭へ整備発展する可能性を残しながらも、一応は方形の単郭の域に止まる。5mもの深さを有する空堀で仕切られた西側を除き、三方は自然の沢沼に囲まれているが、『津軽一統志』や『津軽編覧日記』などの史書にみられる築城の記録が伝えるように、大堰を築いてそこに山田川下流の田光沼より水を切り廻す大規模な工事が試みられている。この工事の主たる目的は治水にあったことが明らかだが、同時に亀ケ岡城の防御性を高める役割も果たしている。主郭に巡らされた土塁が弘前城のそれに準ずる高さを有している点でも、亀ケ岡城が、寛文から延宝期にかけて弘前領内九浦に整備されることになる町奉行所や単なる御仮屋程度の施設に止まらず、軍事的な拠点としても利用可能な施設であったことを物語っている。その点では、むしろ戦国期に整備された城館の城構を部分的に利用している七戸や野辺地といった盛岡藩の代官所に近い。一方で、内部の建物からみると、それら代官所との違いも明らかである。すなわち亀ケ岡城の建物群は、近世大名の居城にある諸施設のうち、治世上最低限必要と思われるものを非常にコンパクトな形でまとめたものと評価できる。その建物配置は、外側の詰人空間と内側の御殿空間から構成されるなど、弘前藩の町奉行所や盛岡藩の代官所よりもむしろ、江戸の大名屋敷、特に藩主の居屋敷である上屋敷との類似性が強い。



第10図　亀ケ岡古館の構　　天和3年（1683）「亀ケ岡古館御図」（弘前市立図書館蔵）より作成



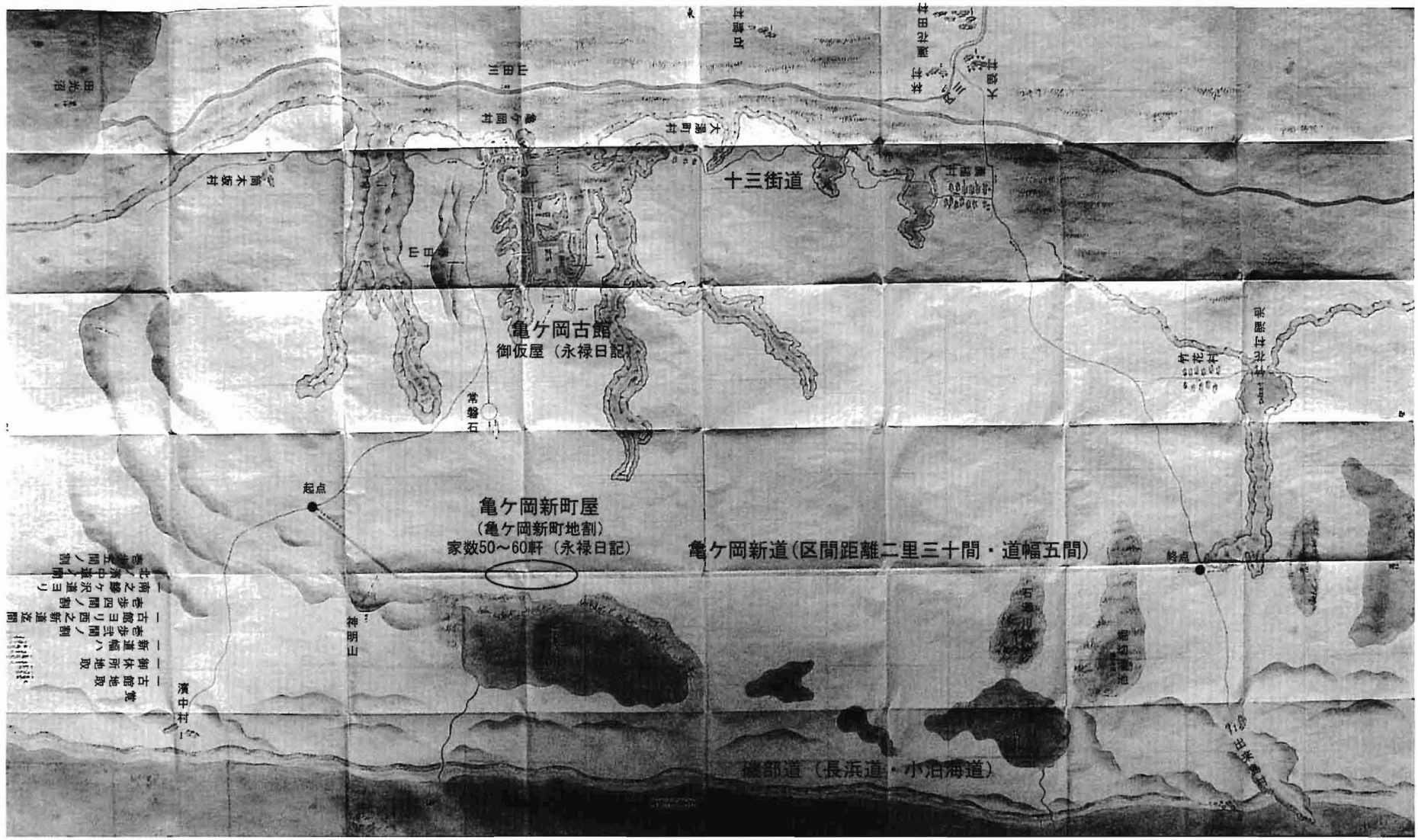
第11図　亀ケ岡古館の建物配置図　　「亀ケ岡御屋敷構図」（弘前市立図書館蔵）より作成

築城を命じた二代藩主津軽信枚の治世で特筆される事業に、岩木川下流域に広がる広大な湿地帯を中心に進められた新田開発がある。三代信義、四代信政と引き継がれた新田開発は、大規模な灌漑事業や新田地帯を西風から守るための屏風山への植林などにより成功を収める。亀ケ岡城は、その地理的位置、築城時期のいずれをとっても、信枚によって始められた津軽半島北部の大規模開発と密接な関連を持つ。また、青森湊が開かれる寛永期以前の段階では、慶長期に近世の湊町として再興された十三湊や、元和元年（1615）に町奉行所が設けられた鰺ケ沢が最も重要な外港であり、弘前藩において領主経済の再生産構造を支える要素としての廻米が始まったのは元和・寛永期（1615～44）とされる。築城が試みられた元和８年（1623）の段階で、鰺ケ沢と十三を結ぶ道筋にあるこの地は、新田開発と廻米という密接に結びついた藩の最重要政策を遂行するにあたり、地政上拠点を構えるに最もふさわしい場所であった。

では、亀ケ岡城にみられる防御性の高さはどのように理解すべきであろうか。領主権力の成立期にあたる慶長期ならともかく、元和偃武の世にあって、弘前城以外の施設にかくも厳重な防御施設を設けるからにはその理由が問われる。正保２年（1645）の「陸奥国津軽郡之絵図」（青森県立郷土館蔵）に記された「狄村」が示すとおり、17世紀の段階では津軽半島の北端部には異民族として認識されていたアイヌ民族の居住地が点在している。その点で、藩祖大浦為信による津軽掌握戦争が、南部氏との抗争であると同時に、実はアイヌ掃討戦でもあったとする長谷川成一氏の見解（長谷川成一 1993）は大変興味深い。実際、記録の残る限りでも、亀ケ岡城築城より遡ること40年前頃までは、西浜の中村（西津軽郡鰺ケ沢町）をはじめ津軽各地で「蝦夷荒」と呼ばれる本州アイヌの武装蜂起が起きていた。17世紀はじめの段階でそうした両者の緊張関係が完全に解消されていたか否かは別として、少なくとも津軽氏側は依然として領内の本州アイヌを含めた「北狄」への警戒心を保持しており、それが亀ケ岡城の高い防御性に現れたのではなかろうか。また、ほぼ完成の域にあった亀ケ岡城を放棄せざるを得なかったのは、元和８年（1622）年、出羽山形の最上氏改易とそれに伴う最上領内諸城破却を通じて、津軽氏が偃武への幕府の強い意志を再認識したためであろう。

築城中止から70年以上の年月を経た元禄９年（1696）、忘れ去られていたかに思える亀ケ岡古館周辺に再び開発の手が入る。すなわち、亀ケ岡古館の跡に御仮屋が、城外には家数50～60軒からなる町屋敷（大湯派立）が設けられ、翌年亀ケ岡に建立された「サカタマノ明神」なる社には貴賤を問わず多くの人々が詣でたという（『永禄日記』）。

元禄期の亀ケ岡周辺の様子を描いた史料としては、元禄９年の年号を有する「亀ケ岡領新道図　附亀ケ岡新町地割」（弘前市立図書館蔵）がある（第12図）。この絵図は、天和の「亀ケ岡古館御図」を参考に描かれた可能性が高く、大きさや表現方法、対象とする範囲など基本的な部分で共通性を有する。一方、亀ケ岡古館の西側、「亀ケ岡古館御図」では空白地帯となっている場所に、新に道路・溜池などが書き加えられるなどの相違点も認められる。具体的には、天和の「亀ケ岡古館御図」では、海岸に沿う磯部道（長浜道・小泊海道）と屏風山砂丘の東辺、山田川に平行して南北にのびる十三街道とを結ぶ東西の道路は描かれていないが、「亀ケ岡領新道図」では、十三街道の亀ケ岡村と磯部道の濱中村、同じく薦槌村と出来島村をつなぐ道路がみられる。同時にこれら２筋の東西路の途中から、道幅５間、区間距離２里30間の「新道」が敷設されている。承応２年（1653）の「津軽領道

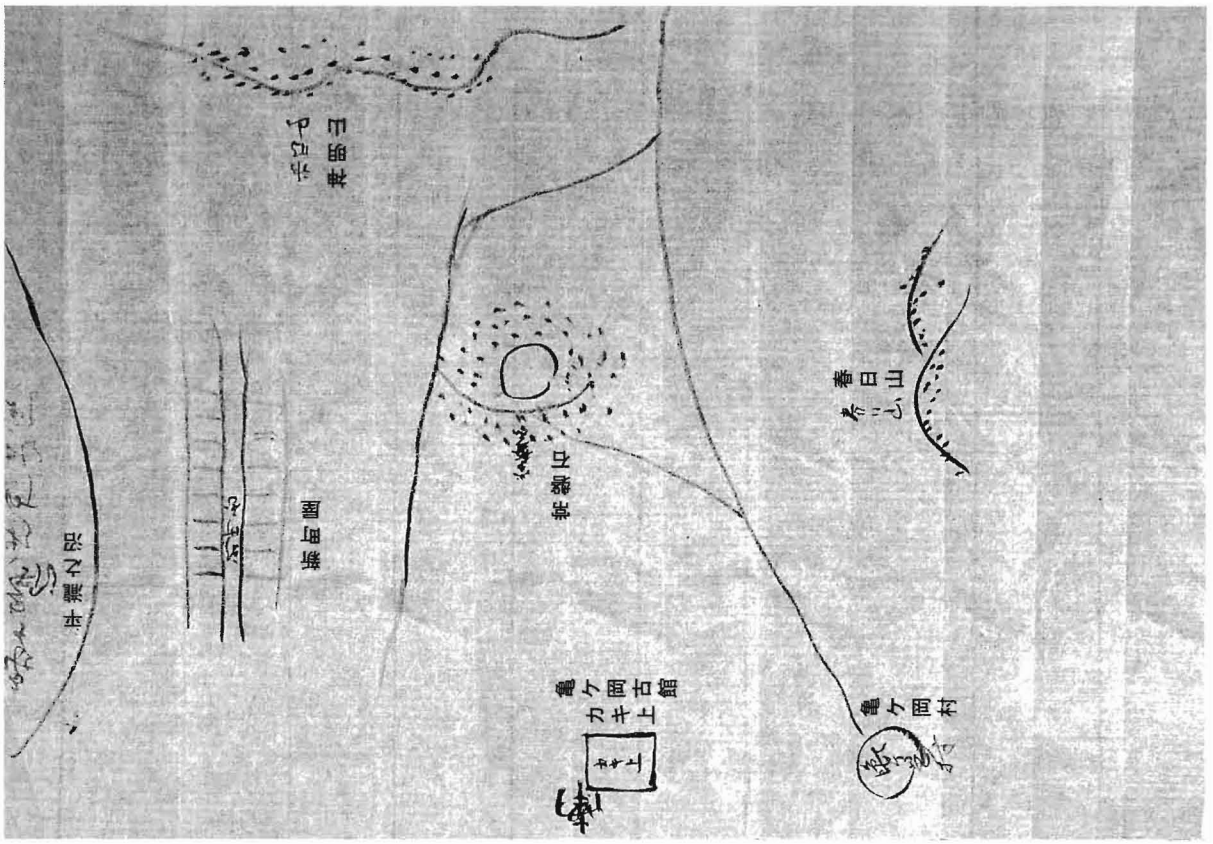


第12図　元禄９（1696）年頃の亀ケ岡古館周辺の様子

（ベースマップには弘前市立図書館蔵「亀ケ岡領新道図」を使用）

程帳」（弘前市立図書館蔵）に拠れば、津軽領における主要道路の道幅は、海沿いの砂浜を行く計測不能な道を除き、最大でも４間である。５間幅で計画された亀ケ岡の新道は、極めて異例といえる。新道は南方で石澤川沼からのびる石澤川溜池と堀切溜池を跨いでいるが、これら２つの溜池とも「亀ケ岡古館御図」には存在しておらず、天和以降、元禄９年までの間に新設された可能性が高い。「亀ケ岡領新道図」には「亀ケ岡新町割」と表書きされた小さな略図が伴っており、それには亀ケ岡古館（「カキ上」と表記）や亀ケ岡村、ランドマークとなる「春日山」・「神明山」・「常磐石」とともに、新道に沿って南北にのびる亀ケ岡新町の町並みが描かれている（第13図）。このように「亀ケ岡古館御図」と「亀ケ岡新道図」を比較してみると、天和３年から元禄９年までの僅か10年余りの間に、亀ケ岡古館の西側、それまで無人の荒野の観を呈していた屏風山砂丘一帯に急速に開発の手が及ぶようになったことが判る。

「亀ケ岡新道図」が作成される前年の元禄８年、四代藩主信政のもと岩木川下流域の新田開発とその新田を西から吹き付ける潮風飛砂から守るため屏風山への植林事業を押し進めていた弘前藩は、元和の飢饉を上回る未曾有の飢饉にみまわれた。元禄の大飢饉による弘前藩の人的被害は、天明の大飢饉に匹敵する程であり、餓死・疫病死あわせ津軽領の３分の１程の領民が犠牲になったという。元禄の飢饉は不作時の上方廻米という経済的・政治的条件により引き起こされた面が強く、その意味で弘前藩にとっては初めての本格的な構造的飢饉であり、これを機に弘前藩の農政は、それまでの新田開発を中心とする外延的拡



第13図　「亀ケ岡新町地割」（弘前市立図書館蔵）

大策から、農業生産過程へ関与し始めるなど本田畑中心政策へと大きく方向転換したといわれる（青森県 2002)。元禄の飢饉が、信政が押し進めていた新田開発と植林事業に極めて深刻な打撃を与えたことは想像に難くないが、未曾有の飢饉から復興するためにも、これらの事業は継続されねばならなかった。飢饉直後に行われた亀ケ岡古城跡への御仮屋の設置と新町屋敷の整備には、新田開発と植林事業に対する信政の強い意志が顕れている。

結語

戦国期、津軽（大浦）氏の地域掌握戦略は、16世紀前葉には日本海側の種里城と津軽平野西端の大浦城、16世紀後葉には大浦城と津軽平野の南関に位置する堀越城というように、常に地理的にある程度の距離を置いた２箇所の城館を核として、それを横に連繋する形で進められていることがわかった。それは本拠を１箇所に定め、種里から大浦へ、大浦から堀越へと順を追って転居するこれまでのイメージとは大きく異なる。

豊臣政権下の奥州仕置、徳川政権下の一国一城令を経て、津軽では弘前城以外の城館整理が貫徹され、弘前城下町へ一極集中化が図られた。

元和期に到り、津軽半島北部の新田開発という藩の命運を左右する未曾有の難事業を推進するため、弘前藩では本拠である弘前城とは別に亀ケ岡城を新たに築く。亀ケ岡城は必要以上の防御性が仇となって、幕府の嫌疑を恐れる余り完成目前に放棄される。70年余りの歳月を経て、元禄の飢饉により危機に瀕した弘前藩は、岩木川下流域の新田開発と屏風山砂丘への植林事業を継続するため、亀ケ岡古館跡に御仮屋を設け、新道沿いに新町屋を整備することになる。二代信牧にとっても四代信政にとっても治政上、亀ケ岡は要地であった。もし仮に信牧により築城された亀ケ岡城が機能していたなら、十三や鰺ケ沢のある日本海側の重要性は維持され続け、陸奥湾に面した青森港、それと弘前を結ぶ羽州街道を第一とするその後の弘前藩の流通機構は、あるいは違った展開をみせることになったかもしれない。

（註）例えば、弘前城の旧追手にあたる亀甲門は大光寺城の大手門を、同じく三の丸北虎口にあった賀田門（明治時代に解体）は大浦城の大手門を移築したものである。また津軽家菩提寺の一つ、弘前西茂森に位置する長勝寺の庫裏（重要文化財）は、大浦城の建物を移築したものと伝えられる。このほか真偽の程は明らかでないが、藤崎町藤崎の浄土真宗真蓮寺の山門も、大浦城の裏門を移設したとの伝承を有する。

引用・参考文献

青森県　2002 『青森県史』資料編近世２（津軽１前期津軽領）

青森県教育委員会　1984 『十三街道』 青森県「歴史の道」調査報告書

青森県立郷土館　1981 『尻八館調査報告書』 青森県立郷土館調査報告第９集

鰺ケ沢町教育委員会　1990 『種里城跡Ⅰ』 鰺ケ沢文化財シリーズ第11集

鰺ケ沢町教育委員会　1993 『種里城跡Ⅱ』

鰺ケ沢町教育委員会　1995 『種里城跡Ⅲ』 鰺ケ沢文化財シリーズ第12集

鰺ケ沢町教育委員会　1998 『種里城跡Ⅳ』 鰺ケ沢文化財シリーズ第13集

岩木町教育委員会　1996 『大浦城跡遺跡』

神山仁　2001 「豊臣奥羽諸城破却令と元和一国一城令」『第２回北日本近世城郭検討　会資料集』 47～82頁

菊池信吾　2002 「津軽氏城跡の研究」『地域考古学の展開』 村田文夫先生還暦記念　論文集　349～

363頁
菊池信吾　2003 「近世・堀越城から弘前城への歴史景観」『遺跡と景観』 東北中世　考古学叢書３　高志書院　143～158頁
工藤清泰ほか　1989 『浪岡城跡Ｘ』 浪岡町教育委員会
佐々木浩一　2000 「青森県中・近世遺跡の景観―小沢館・境関館・浜通遺跡・十三湊遺跡・種里城―」『青森県史研究』第５号　17～35頁
佐々木浩一　2002 「扇の要―東北北部における中世城館の曲輪配置―」『海と考古学とロマン』 297～308頁
関根達人　2004 「出土陶磁器からみた津軽（大浦）氏関連城館跡の検討」『貿易陶磁研究』24　152～170頁
関根達人　2005 「城跡にみる南部氏・津軽氏近世大名への道筋」『日本海域歴史大系』４　清文堂　131～157頁
中田書矢　2002a 「種里城」『考古学ジャーナル』493　15～18頁
中田書矢　2002b 「津軽西浜の歴史景観」『遺跡と景観』 東北中世考古学叢書３　高志書院　159～178頁
中田書矢　2003 「種里城跡」『中世糠部の世界と南部氏』 七戸町教育委員会編　111～122頁
中田書矢ほか　2002 『種里城跡―津軽氏城跡の発掘調査―』 鰺ケ沢町教育委員会
長谷川成一　1993 「本州北部における近世城下町の成立」『海峡をつなぐ日本史』 三省堂　141～181頁
長谷川成一　1994 「北の元和偃武」『年報市史ひろさき』３　弘前市史編纂室　36～59頁
弘前市教育委員会・堀越城跡発掘調査委員会　1978a 『堀越城跡　国道7号線石川バイパス遺跡発掘調査報告書』
弘前市教育委員会・堀越城跡発掘調査委員会　1978b 『堀越城跡　前川災害復旧関連　工事遺跡発掘調査報告書』
弘前市教育委員会　1999 『史跡津軽氏城跡　堀越城跡試掘調査報告書』
弘前市教育委員会　2000 『史跡津軽氏城跡　堀越城跡発掘調査報告書Ⅰ』
弘前市教育委員会　2001 『史跡津軽氏城跡　堀越城跡発掘調査報告書Ⅱ』
弘前市教育委員会　2002 『史跡津軽氏城跡　堀越城跡発掘調査報告書Ⅲ』
弘前市教育委員会　2003 『史跡津軽氏城跡　堀越城跡発掘調査報告書Ⅳ』
弘前市教育委員会　2004 『史跡津軽氏城跡　堀越城跡発掘調査報告書Ⅴ』
弘前市教育委員会　2005 『史跡津軽氏城跡　堀越城跡発掘調査報告書Ⅵ』
藤沢良祐　2001 「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会資料集　瀬戸市埋蔵文化財センター　15～52頁